
Ein Band der Rache

雨音ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ein Bander Rache

【Nコード】

N1615G

【作者名】

両音ナギ

【あらすじ】

近年、稀に見る工業が発達した国『アルマヴィオラ』
工業が盛んなことは有無も言わずだが、この国には三つの組織によ
って成り立っている。

「ミーティア」「ソルド」「ラルフ」

ミーティアは現在この国の主権を握っている一番の組織であり、ソ
ルドはこの国唯一の過激派である。

一方、ラルフはこの二つの組織とは違い、中立を図っている組織で

あった。

全ては復讐のために。

十五年前、この世で唯一の肉親の姉を失い、『ある組織』に復讐を誓ったとある少年のお話。

最後まで約束を守ってくれないんだね。

僕は目的を果たすためなら銃を放つことも厭わないさ。

プロローグ

「姉さん止めてよ!」

まだどこか幼さを残している黒髪の少年の声が部屋中に響き渡る。

此処はとある町の倉庫の一角。

深夜の裏通りのせいか、辺りは闇に包まれ閑散としている。

数十分前、少年と少女の二人は追っ手を振り切るかのように走り続け、近くにあつた廃工場に身を隠した。

現在は使われていないのか部屋の中はカビた匂いが充満し辺りは闇に包まれている。

少女は息が上がっている少年を突如、壁に押さえつけ、手元にあつた鎖で手足で縛り近くの箱へと投げ込んだ。

「ごめんね……。これしかあんたを守れる方法が無いんだ」

この状況にも関わらず、彼女は薄らと笑みを浮かべていた。

だが、笑顔は何処か引きつっており今にも泣き出しそうな表情だ。

少年も彼女を止めようと体を動かそうとするが自分の両足に付いている重りと両手を縛られた鎖が邪魔で自由に動けない。

「こんなことして悪いと思ってる。でも、この世でただ一人の弟を守る……。いや、あいつらから逃れるにはこれしか無いんだ」

「だからって……。こんなこと……」

目の前にいる少年を愛しそうに彼女は彼の淡い真紅の瞳を見つめながらこう言った。

「一つだけ約束してくれない？私の分まで絶対に生きてね？」

無論、それは絶対に嫌だと言わんばかりに少年は首を横に振る。鎖が絡まって辛そうにしている彼を見やりつつ、少女は何処か寂しげな表情を浮かべながら彼から離れていった。

そして何かを決したように、懐から何かを取り出す。

拳銃だった。

少年は何かに気がついたように手を伸ばそうとするが、彼女との距離はかなり離れていてその手は届かない。

「そっか……。最後まで私の約束守ってくれないんだ……。でも、私のこと忘れないでね？」

彼女は自分の頭に銃口を押し付けた。

少女の頬に一筋の涙が零れ落ちていく。

「やめるー！」

少年は動かない両足をもがき続け、必死に彼女に向かって縛られている手を伸ばす。

しかし、彼の制止も虚しく、一つの乾いた銃声音は周りに響き渡り、少女の体はゆっくりと血の海へと沈んでいく。

それでも、彼女は少年を見つめ微かに笑っていた。

「畜生……。ちつくしょうー！」

悔しそうに歯軋りをし、誰もいない倉庫の中で彼は動かなくなった少女の亡骸に向かって叫び続けた

第一話

「　　」

妙な息苦しさを覚えて彼はうつすらと目を開けた。

目を開くとそこはあの血生臭い倉庫の中ではなくいつも寝起きをしている組織の寮の一人部屋。どうやら夢を見ていたらしい。

時刻は深夜零時を過ぎており、辺りは闇に包まれている。

唯一、窓から入る月の光が彼の姿を淡く照らしていた。

「そうか、あれから十八年か」

当時十にも満たない少年だった彼はとある出来事で唯一の肉親であった姉を亡くしていた。

今、その時のことが夢に出てきたのだろう。

「姉さん……」

あの時、どうして彼女を救ってあげられなかったのだろう。何度も悔やんでも悔やみきれない。無意識のうちに彼の手に力がこもる。

「一体、誰が姉さんをあそこまで追い詰めたんだ……」

走馬灯のように姉との思い出が蘇ってくるが、少年は首を横に振りあの時の記憶を思い出さないように努めた。

今思い出すと前に進めなくなる、と思い泣きそうになるのを堪える。

「　　楽しかったあの日々は二度と戻らないんだ……。でも、せめて……せめての償いとして今は姉さんの真実を暴くためにこうして

生きてる。真実が分かるまで死ぬわけにはいかないんだ。」

彼はそう呟いた後、体勢を整えてもう一度ベットに入りなおすが中々寝付けない。

再び深い眠りについたのは日が明るく始めた頃だった。

「……………レン、アレン！」

突然、耳元での大きな声にベットで寝ていた青年は飛び起きた。

寝ていた彼は大声を出され、不機嫌そうな表情を浮かべており、横を見ると煌いた銀髪を揺らし眉をつり上げた碧眼の瞳を持った青年が彼を見つめていた。

起こされたアレンは眠そうに目を擦っている。

「なんだ、ウィルか。どうしてそんなに怒っているんだ？」

するとたちまちウィルと呼ばれた青年の表情は呆れた表情へと変わっていき小さく溜息をついた。

「どうして怒っているのか？それは時計を見てから言ってください」

「……………時計？」

訝しげにアレンはベットの真横においてある目覚まし時計の時刻を見やる。

シンプルなデザインが特徴的な目覚まし時計が指している時刻は午前九時。

すると彼は納得した表情を浮かべた。

「ああ、今日も遅刻したな」

「今日も遅刻したじゃないですよ！何回遅刻したら気が済むんですか！」

「……少し考え事してて眠れなかったんだよ」

小さく欠伸をしよう一度寝ようとベットに身を潜らせる。だが、ウィルはいい加減にしろと言わんばかりの表情で彼を見やり、すかさずアレンの上にかけてある布団を引っ張り上げた。

「もういい大人なんですからそんなのは理由になりませんよ。それとそれ以上寝続けると言うのであればどうなるか分かってますよね？」

淡い碧眼の瞳が彼の真紅の瞳を見据える。

その目からは早く起きないと酷い目にあわせますよ？と言っているようだった。

「……わかったよ」

流石にそのような目で見られ恐怖を感じたのか、アレンは渋々かけてあった布団を取りまだ小さく欠伸をしながらもゆっくりとベットから起き上がった。

パジャマからフードの付いた漆黒の服に銀色の縁を彩られたいわゆる組織服と呼ばれるものに替え部屋から一歩出る。

既にウィルは彼を起こした後、組織に戻り他の仲間も既に仕事に行っているようだった。

「まったく……。今日は休日なのに何で臨時出勤しなきゃならんのだ」
アレンは未だ文句を言いながらも一歩ずつ足を進めていき、寮から
出た後彼が所属している組織「ソルド」へと向かっていく。

この国“アルマヴィオラ”では、三つの組織によって成り立ってい
る。

「ミーティア」「ソルド」「ラルフ」

ミーティアは現在この国の主権を握っている一番の組織であり、ソ
ルドはこの国唯一の過激派である。

一方、ラルフはこの二つの組織とは違い、中立を図っている組織で
あった。

彼が過激派のソルドへ所属した理由。

それは唯一の肉親であった姉の死の真相を知るためだ。

別にミーティアやラルフにも所属しても良かったのだが、この世の
中が理不尽な世界であることに不満を持っていることや姉自身もソ
ルドに所属していたこともあり二年前、今の組織に所属したのだっ
た。

多くの家が立ち並ぶ細かい路地を抜け、額からにじみ出る汗をコー
トの袖で拭きながら歩くこと数十分。

この国の南側にある都市・ヴィオラでもっとも目立つであろう建物
の前に辿り着いた。

建物は漆黒で覆われ、十字架のデザインが施されており、はるか昔
魔物が信じられていた時代に彼らから身を守るために必ず持ち物に
は施されていたといわれる水晶やサファイアを用いた宝石の護符が
門のいたるところに散りばめられている。

一般人が見たら間違いない怪しいオカルト集団の建物だと勘違いす

るだろう。

実際、アレンが初めてこの建物の前に来た時は、異様な雰囲気に驚きを隠せなかったほどだ。

彼は散りばめられた宝石の護符が目立つ門に手を当て静かに目を瞑る。

その瞬間、微塵にも音を立てず門が開いた。

いわば、この技術は他の国の技術で使われている指紋認証技術のよくなものであり、自分の精神を機械に登録した人間のみしか開くことは出来ない。

万が一、登録した人間以外の人物が故意に開けようとする高電圧の電気ショックが体中を巡り感電死してしまう。

アレンは門を潜り奥にある茶色い古びた扉に手をかけた。

扉を開くと、既にメンバーは仕事を始めており、書類の整理に追われる者やこれから仕事に出かけようと準備をしている者がちらほらと見受けられた。

慌しく人が行きかっている中で、一つの視線がアレンを睨みつけていた。

その人物は部屋の中心にあるデスクに座っており、茶色の髪を撫でつけ、黒縁眼鏡の奥から漆黒の瞳を覗かせている。

「やっと来たのか？」

低い声でアレンを睨みつけていたのは彼の上司に当たる人物のアドルフ・クライドである。

「申し訳ありません」

アレンは彼のデスクに近づき、視線を無視しながら感情がこもっていない声でそう言って頭を下げた。

その様子を見てもアドルフは表情を揺るがせず、厳しい面持ちで彼を見つめている。

「もうこれで何回目だと思ってるんだ？お前が“普通の奴”なら即クビになってるぞ？」

「はい……。以後、気をつけます」

「もうその台詞は聞き飽きた」

アドルフはもういい加減にしてくれという表情を浮かべて小さく溜息をつく、彼はデスクの上においてあるさまざまな資料に目を落とし、とある資料数枚をアレンに手渡した。

「仕事だ。お前は、遅刻したんだからな。きつちりと働いてもらおうぞ」

「分かってますよ」

彼はアドルフに対して苦笑いを浮かべながらも手渡された資料に目を通す。

重要な書類と言われ、渡された紙はたったの二枚だけで、アレンは不思議に思うが、口には出さない。

彼は畳んである一枚目の紙を開いた。

そこにはこの国の主要となる部分の地図　この国で利用されているもっともポピュラーな全国版の地図が詳しく載ってあった。

軽く目を通して閉じた後、一枚目よりは少し小さい二枚目の紙を開く。

こちらは一枚目とは違い、今回の仕事内容について書かれてあった。

「今回の仕事は……アレシアの第五地区？アレシアはミーティアの管轄じゃ？」

アレンの言う通り、この国の三大組織の一つミーティアはこの国の北側のアレシア地域を本拠地にして活動をしている。

無論その周りの出来事はミーティアが全て管理しており、アレシアとは反対側に位置するヴィオラに活動拠点を置いているソルドが手を出すことは無い。

「確かに、お前の言うとおりだ。だが、状況が変わったらしくてな」

「状況が変わったとは？」

資料を横目に見ながらもアレンは眉をひそめ、データ入力に勤しんでいる彼の姿を見据えた。

「まあ……詳しいことは向こうに行って聞いたほうがいいだろう。」

お前のパートナーのウィルも一緒に行くようにな」

「……………？わかりました」

上司の様子がおかしい、とアレンは訝しげに思い少し頭を傾げながらも資料を一通りざっと読み終える。

そして、踵を返し窓側にある自分がいつも座っているデスクへと腰を下ろした。

第二話

「もう仕事入ったんですか？」

そう言ってアレンに話しかけてきたのは隣のデスクで資料を片付けていた彼より二、三歳ぐらい若いであろう灰色の髪でココア色の瞳が特徴的な青年だった。

彼のデスクには、はみ出るぐらいに紙の書類が積み重なっており、どうやら今日は書類の量が多いらしい。

しかし、当の話しかけた本人はたいして気にもせずテンポ良く仕事を片付けていつている。

アレンはそんな忙しそうな彼に目を向けながらも装備を整え、出かける準備をしていく。

「まあな。つたく、アドルフもあんなに怒らなくてもいいと思うんだがな。あいつに牛乳を数百本飲ませてやりたいぐらいだ。そう思わないか？スコット」

スコットと呼ばれた青年は彼の言葉に苦笑いを浮かべながらも自分のデスクの上にある膨大な資料をパソコンに打ち込んでいく。

「まあ、確かにそうですね。今回の仕事は何処へ？」

「北のアレシアだ」

そう言葉を聞いた瞬間、スコットの作業していた手を止めると、アレンの方を振り向き、首を傾げ、怪訝そうな表情を浮かべる。

「アレシア？アレシアは、ミーティアの管轄地じゃありませんでし

た？」

「ああ、僕もそう思ってアドルフに言ったんだが……。アドルフが向こうで詳しく聞いてこいと」

「そうなんですか……」

まったく面倒なことだ、と呟きながらアレンは座っていた椅子から立ち上がり彼がいつも仕事の時には持ち歩いている漆黒のデザインの二丁拳銃をあまり人目につかないよう黒いコートで隠し腰のホルダーに収める。

その様子を見ていたスコットは中断していた片付けの作業を再開しながらもこちらを向き、心配そうな表情を浮かべてアレンを見つめていた。

「気をつけてくださいいね？」

「心配しなくても大丈夫さ。へまはしない」

「自分を過大評価し過ぎて油断しないようにしてくださいよ？」

「わかってるよ、じゃ後は頑張れよ」

書類作業に追われているスコットに背を向けたアレンはやたらとオカルトチックが目立つ扉を開け、たくさんの人々が行き交う街中へと歩き出す。

そして、今日の天気の良いさに感慨深い思いをしつつもこの都市の唯一の駅「ヴィオラステーション」へと足を進めていった。

まだお昼前だというのに街の大通りには、たくさん露店が立ち並

んでいた。

時折とある露店の前を通り過ぎると香ばしい焼き鳥の匂いや野いちごをふんだんに使った甘酸っぱいパイの匂いが鼻につく。

（そういえば、まだ朝は何も食べてなかったな……。朝食がてら何か食べるか）

そう思い立ち暫く商店街の道を数分歩いた後、彼はとある露店の前で立ち止まった。

店の看板には「サンドイッチ専門店・Merry's House」と書いてあり、サンドウィッチ専門店であることは誰が見ても一目瞭然だ。

「おお、アレン、いらっしやい」

店主は立ち止まっているアレンの存在に気が付いたのか、にこやかな表情を浮かべるとこちらを見据えた。

実はアレンはこの店の店主とは既に顔なじみで小腹が空いたときにはこの店にいつも立ち寄り、サンドウィッチを買っていた。

そのことからいつの間にかこの店の常連客となっていたのである。彼も笑顔で店主に返す。

「やあ、メリーさん。今日のおススメ何がある？」

「今日は、新鮮な食材がたくさん入ったからね。色んな食材をふんだんに使ったミックススペシャルがお勧めかな？」

「じゃあ、ミックススペシャルを二つお願いできるかな？」

「あら？今日は結構食べるのね。二つで銅貨2枚だよ」

「連れがいるもんでね。いつも起こしてもらって悪いからさ。これ、代金ね」

アレンはポケットから黒い財布を取り出して、店主に神聖的なデザインが施された二枚の銅貨を手渡し、普通よりふた周り大きいと思われるサンドウィッチ二つを受け取った。

あまりにも大きいため茶色い紙袋からは今にもサンドウィッチがはみ出しそうだった。

「その風貌を見てると今日は郊外へ行くのかい？」

「ん、まあね。北のアレシアにちょっと」

「アレシア！？それまたずいぶん遠くな場所に行くんだねえ」

「此処からじゃ、この国の最新工学の技術を使っても半日は掛かるね。なんせこの国の土地は広いからさ」

「そりゃ、大変だね。じゃあ、これ、持っていきな」

店主はそう言うとアレンが持っている茶色い紙袋の中にもう二つ小さなサンドウィッチを入れた。

突然の行為にアレンは驚いて、咄嗟に財布から銅貨を出そうとした。しかし、それを店主が手で制する。

「えっ？いいの？お金は……？」

「これはいつもうちに來てるサービスだよ。仕事頑張ってきたな！」

「分かった。ありがとな！メリーさん！」

彼女に右手を上げて軽く手を振り、更に量が増えたサンドウィッチが入った茶色い袋を両手で抱えると、こちらに向かっっていく人々とすれ違い、露店がひしめいている大通りを抜けていく。

交差点を通り、公園を抜け、やがて駅前広場にたどり着くと純白に金があしらわれた大きな時計台の前でウィルは上を見上げしきりに時間を気にしながら、アレンを待っている姿が目に入った。

第三話

「遅いですよ、アレン。待ち合わせ時刻から既に十分経過してます」
待たされて不機嫌なのか少し苛立っている声音でこちらに走り向かってくるアレンに対してそう言った。

彼は申し訳ない表情を浮かべ紙袋を持ったまま、悪いなと言いつて、軽く頭を下げた。

「ちよつとお腹が空いてこれ買ってたものだから」

彼は自分が持っていた茶色い紙袋を指してウイルに見せた。

何が入っているのかと思ひ、ウイルは茶色い紙袋の中身を覗き込む。袋の中身を見た瞬間、彼は驚いた表情を浮かべた。

「サンドウィッチ？それにやけに大きいサンドウィッチですね」

確かに普通のサンドウィッチよりふた周り大きい。

例えて言うとならば、ハンバーガーのビックサイズぐらいだろう。

その大きいサンドウィッチが四つも入っているのだ。

驚くのも無理は無い。

驚いている彼をよそに、アレンはサンドウィッチが入った袋を持ち直し、再び話し始める。

「これ、ミックスサンドって言って、結構美味しいんだ。向こうに着くまで此処から数時間は掛かるだろう？丁度いいと思ってさ」

待ち合わせ時刻に遅れ、その理由がサンドウィッチを買っていたという事実にはウイルは小さく溜息を付くしかない。

「まったく……。もうそろそろ列車の出発時刻になりますから、急いで四番ホームに行かないと間に合いませんよ？」

ウィルは紙袋を持ったアレンをちらりと横目で見やり、人を掻き分け駅のチケット売り場へと入っていく。

「って……ちょっと待てよ！」

彼の少し冷めた態度に若干焦りを覚えながらも、アレンは置いていかれないよう周りがたくさんの人が行きかう中、早足でウィルの後について行った。

「特急の北のアレシア方面です……。いや、二人です。銀貨二枚ですな」

アレンはウィルの姿を追っていくと、既に彼はチケット売り場で特急のアレシア行きチケットを購入しているようだった。

ウィルは小窓の向こうにいるチケット販売員に銀貨二枚を手渡し、二枚の赤色のチケットを受け取ると、こちらに向かって走ってきたアレンに手渡す。

「チケットは買っておきましたよ。さて、四番ホームへ急ぎまじょうか」

「あ、ああ」

見失わないように走ってきたせいかアレンは荷物を持ち、肩で息をしながら、四番ホームへと続く階段をウィルと共に一歩づつ降りていく。

ホームに着くと、黒く風情を醸し出した大きな列車が止まっており、今か今かと出発を待っていた。

アレン達は乗車口の前にいる駅員にチケットを手渡し、切符を切ってもらった後、すぐさま列車に乗り込むと、彼らの乗車と同時に列車のドアが閉まり、一歩ずつ加速し始め列車は動き始めた。

「何処に座る？」

「こちら辺にしましょうか」

列車が発車した後、彼らは前の車両から最後尾の車両へと移動し、机を隔てて向かい合って席に座り腰を下ろしていた。

今回乗った列車は、昔使われていた在来線の黒い列車の為、少し揺れが気になるが、二人は構わず話を続けている。

「じゃあ、食べるか」

そう言ってアレンは持っていた茶色い紙袋を机の上に置きサンドウィッチを取り出し、ウィルに手渡した。

「ありがとうございます、それにしてもこのサンドウィッチ本当に大きいですね……」

「ん、まあな。二つ食べたなら夜まで持つと思うぞ？まあ、食べてみなよ。美味しいから」

笑顔でアレンにそう促されてウィルは一通り見回すと大きなサンドウィッチを両手で持ち、一口食べる。

すると、ウィルの表情はさっきまで不機嫌だった表情がたちまち明るくなった。

「確かに……！これは美味しいですね」

「だろ？やっぱり、メリーさんのサンドウィッチが一番だな」

アレンも袋からサンドウィッチを取り出し、これでもかというぐら
いに頬張り食べ進めていく。

二人がサンドウィッチを食べ進め、一つ目の長いトンネルを抜けた
頃、列車の景色はいつも見ている穏やかなヴィオラの景色ではなく、
工業的な建物が立ち並ぶ景色に変わっていった。

第四話

「どうやら、ヴィオラを抜けて、第二工業都市のフィオナの近くまで来たみたいですね」

「ああ。そうだな。だが、フィオナだったらアレシアまでまだまだだろう。先は長いな」

「そうですね」

第二工業都市とあってか、工業の発達が他の地域に比べてめまぐるしいようだ。

工場からは常に煙突から煙が出ており、工場の中で人々が汗を流し働いていることは何となく想像できる。

他の地域ではまだ未発達な階段が動いて人々を楽に移動させる技術のエスカレーターや
今までの無線回線から、高速に大量のデータをスムーズに送れる光通信といったものまで日常的に使われているらしい。

「工業都市とあってか、色々と発展しているみたいだな。ヴィオラからこれだけ近いのに
仕事に関係していなかったこともあってまったく行っただけだ。今度機会があったら行ってみたいものだな」

アレンはそう言って窓の外に広がる景色を眺めながらも、袋に入っているもう一つのサンドウィッチに手を伸ばそうとしたとき、突然、大きな爆音と共に列車内で激しい揺れが起こった。
列車は爆音と共に停車したようである。

その時、激しい音を立て黒い布で顔を隠した数人の男が列車のドア

を薙ぎ倒し入ってきた。

ある男は乗っていた乗客に向けて銃を構え、またある男はナイフを乗客の首元に当てつけ動けなくさせている。

「おい、てめえら動くんじゃないぞ！動いたら……こうするぞ！」

リーダー格と思われる男は持っていたライフル銃の銃口を上に向けて一発放つ。

その銃声音に乗っていた乗客らは身震いをし、悲鳴を上げた。

「五月蠅い！黙ってる！」

男は上にもう一発銃を撃ち、乗客を静かにさせ、同時に持っていた黒い袋を持ち出した。

「ふん……。中々聞き分けのいい奴らじゃねえか。次、悲鳴を上げたら唯で済むと思うなよ？」

ニヤリと不気味な笑みを零し、近くにいた男の仲間を呼び寄せ集める。

「おい、乗客から金目のものを取って来い！」

了解したという面持ちで男の仲間数人が一斉に散らばった。

彼らは前方車両から周っていき、乗客の首に武器を突きつけ、金目の物を奪い去る。

空っぽだった黒い袋の中には次々と金の懐中時計や貴金属などが集められていった。

そして、男達はアレン達が座っている後方車両に向かって来ている。

「こちらに向かっけてきてますね。アレン……ってこの場に及んで何しているんですか」

男達に聞こえないようアレンの耳元で声を潜めて言うウィルだったが、アレンはさほど気にしてない様子で、外の景色を眺めながら黙々とサンドウィッチを食べ続けている。

「ん？なんか言ったか？」

彼は食べている口を動かさず、向かい側に座っているウィルに視線を向けたが、今、彼が言ったことを全く聞いていなかったらしい。

「いえ、何でもありません……」

ウィルは額に手を当て、溜息をつきそう言おうとしたその時、

「おい、てめえら、金を出しな！」

男が武器をちらつかせ物品を要求してきた。

彼らは一番後ろに座っていたアレン達のところまで来たらしい。早く金品を手にして逃走したいのか二人に武器を突きつけ、急かした口調で言う。

ウィルは男達に逆らわないよう持っていた持ち物を男達に渡す。しかし、アレンだけは恐ろしいくらい黙々とサンドウィッチを頬張っており男達の方すら見ていない。

「おい、さっさと出しやがれ！」

首元にナイフをちらつかせ、催促するがアレンはまるで聞こえていないかのように無視をしている。

「お前、死にたいのか？だったら望みどおりにしてやるよ！」

その姿に男は怒りの頂点に達したのか声を荒げてそう言うと、ナイフをアレンに向かって振り下ろした。

「調子扱っているのもいい加減にしろよ？」

ナイフが振り下ろされる寸前、アレンはサンドウィッチを銜えたまま、男のほうを見向きもせず腕を掴み、動きを止めていた。

「なっ………！」

突然の出来事に男は動揺を隠せない。

なぜなら、彼はこちらを見向きもせずにナイフを止めたのだから。

「く、くそおおおおお！」

逆上した男はもう片方の手でアレンに殴りかかろうとするが、その寸前に彼はもう片方の手で男の鳩尾に殴りを入れた。

同時に男は意識を失い地に伏せる。

その様子を見てか、仲間の男達は乗客たちに武器を突きつけていたのをやめてアレンの方に視線を向けて武器を構える。

仲間の人数はざっと四、五人程度だろうか。

人数は少ないながらも武器は中々のものを備えている。

「さあ？武器を持ってないお前らに俺達に勝てるかな？」

挑発とも取れる男らの発言に対してアレンは食べていたサンドウィッチを机の上に置き、不敵な笑みを浮かべた。

「勝てる？笑わせんな。お前らなんか敵の数に入ってねえんだよ」

「何だと？てめえ、調子乗ってんじゃねえぞ！」

銃を持った男達はアレンに向かって数発の弾丸を撃ちこむが、まるでアレンは軌道を読んでいるかのように降り注ぐ銃弾を避けていく。幸いにも、この車両には他の客は乗って居ない為、流れ弾があたることはないだろう。

「くっそ！何故当たらないんだ！」

苛々した様子で無我夢中で銃を撃ちつける男達。

しかし、当のアレンはその様子を楽しむかのように男達の攻撃を避けていく。

「お前らと僕じゃ格が違いすぎるんだよ」

「!?!」

その瞬間、アレンの姿は男達の前から消え去る。

そして、ある男が後ろを振り向いた瞬間、アレンの蹴りが男の腹に入り持っていた銃を手放し苦しそうな表情で地面に手をつく。

あまりにも自分達との格の違いに青ざめた表情で男達は唯呆然と見ているしかない。

「お前……。何者だ」

短刀を手に持った男は青ざめた様子でアレンを見つめてそう尋ねた。アレンは身を翻して男のほうを向くが目が笑っていない。

「誰？『冷酷のアレン』と言ったら分かるかな？」

「冷酷のアレン!?!」

残っていた男達の仲間はずき青ざめた表情から一変、驚きの表情へと変わる。

「こいつ、ソルドの奴だったのか。だったら尚更だ……。皆、こいつをやっちまえ！」

未だ、青ざめた表情を浮かべながらも残っていた男らは武器を手にして、アレンへと一斉に襲い掛かってきた。

「ちつ……。汚い奴らだ」

舌打ちをし、コートを翻すと腰に付けてある近距離用の短刀を取り出し構える。

それと同時に短刀を持った男はアレンに切り付けかかろうとするが、彼はそれを流し後ろへと回り男に短刀の嶺の部分を勢い良く男の首元に入れる。

「っ!」

首元を強く打ち込まれた男は瞬時に意識を失い地に失せるが、同時に二人の男がアレンの背後に回りこちらへと向かってきていた。

(しまった!)

そう思ったときにはもう遅く挟み撃ち状態になり二人の攻撃はアレ
ンの方に直撃するかと思えたが、一向に二人の攻撃が彼に来ること
はない。

アレンは瞑った目を開けると、彼に襲い掛かるうとしていた男二人
は武器を手に持ったまま倒れていた。

「もう……アレンがやっていることを見ているとこっちがひやひやし
てきますよ」

倒れている男たちの後ろを見ると、彼のパートナーのウィル・アー
ヴィンが銀髪を揺らし澄ました顔でこちらを見据えていた。

「……ウィル助かった」

起き上がり安堵の表情を浮かべ、そう言うアレン。

ウィルは男達の後ろに回り、彼が愛用している長剣の柄を使い男の
首元に殴りこんだようだ。

第五話

「パートナーである以上お互い助け合うのが当たり前ですから」

剣を腰に収め、微笑を浮かべて当然のことだとばかりにいうウィル。確かにそうだな、とアレンは軽く相槌を打ち、近距離用の短刀をコートの内側にある鞘に収めようとした時、突如、大きな音を立てドアが開いた。

どうやら先頭車両からリーダー格と思われる男がドアを蹴飛ばしアレン達がいる車両に入ってきたようだった。

「おい、お前らまだ集めてないのか……っ！」

男は最新型のライフル銃を持ったまま目の前に数人の仲間が倒れている様子を見て絶句してしまう。

「ああ、そうだったな。まだいたんだな」

アレンは面倒臭そうに再びコートを翻すと、ホルダーに入っている二丁拳銃を取り出して銃口を男のほうに向けた。ウィルもそれに倣い、腰につけてあった剣を構える。

「んな……！まさかこいつらをお前らが……！」

「だから？悪いのはお前らのほうだろう。いちいち面倒な質問するな。屑が」

「なんだと？なんならお前から先にあの世に送ってやるよ！」

男はそう叫ぶとライフル銃を構え、アレンに向かって打ち続ける。アレンとウィルは横に避けるが流れ弾の一つがアレンの横をすり抜け、彼の頬から一筋の血が流れ落ちた。

それでもアレンは気にも留めず、流れ弾を避けながら男の下へと一目散に走り出す。

そして、男が弾を入れ替える一瞬の隙を見てライフル銃を掴み、身を翻し男の後ろへと回り込んだ。

いきなりの出来事に男は驚きを隠せなかったが、素早く男は後ろに回りライフル銃を構えて撃とうとした。しかし、引き金を引いても一向に弾は撃ちだされない。

「何故だ！何故、弾が出ないんだ！」

男の表情に焦りの色が見え始める。

引き金を何回も引くが弾は出てこない。

そんな男の様子を冷たい目で見据えアレンは言葉を紡ぎ始めた。

「なあ、安全装置って知ってるか？」

「安全装置！？ま、まさかあの掴んだ時に！？」

「そう。銃なんて僕の得意分野だから。安全装置を有効にすると出る弾も出なくなるんだよ。銃を扱ったならそのぐらいの知識くらい持ってなきゃ」

「このガキ……！」

男は冷静さを失ったのか銃を手放し素手でアレンに襲い掛かろうとした。

その寸前にウィルが背後から男の首元に手刀を銜え、男は地面に倒

れる。

「ウィル、ナイス！」

「ほんと、なんで貴方と一緒に居たらいつもこんなにひやひやしな
きゃならないんでしょう……」

額に手を当て溜息を付くウィル。

そんなウィルの姿を見てさっきの表情とは打って変わってアレンは
楽しそうに微笑んだ。

「まあまあ、スリルな人生もいいんじゃない？」

「いい訳ありませんよ！」

「お前はもうちょっと頭を柔軟にしたほうがいいぞ？」

「あのね……」

その時、外から人々の声が聞こえ始めた。

窓の外から野次馬もちらほら見えるがその間を潜り抜け青いコート
に身を包んだ人々がやって来ており、どうやら誰かの通報で、フィ
オナの警備隊がこちらに向かって来たらしい。

「そう言っている間に、警備隊が来たようだな……。こいつらの身
柄引き渡し手伝えてくれ」

「……分かりましたよ」

ウィルは何処か不服そうな表情を浮かべて、アレンと共に野盗達を

後から来た警備隊に引き渡す作業を始めたのだった。

第六話

「あーあ。これじゃ、お昼過ぎには到着できないな……」

「仕方ありませんよ。復旧するまで待つしかないですね」

野盗達をフィオナの警備隊に引き渡した後、今度は現場検証と列車の復旧作業が始まっていた。作業は数時間掛かるらしく二人は此処で足止めを食らうしかなかったのだ。

おまけにこの町は列車以外の公共交通手段は無く、車で移動しようにもアレン達の手元には車が無い。

本部に要請して車を調達出来ればいいのだが、此処からヴィオラまで車で行くとなると列車より時間がかかってしまい下手をしたら日が暮れてしまう。

いやがおうにもこうして復旧を待つしかないのだ。

二人揃って溜息を付いていると事件があった列車付近から甲高い声が聞こえてきた。

「ちよつと！状況報告遅いじゃないのよ！」

警備隊のシンボルである羽の付いた淵の広い帽子を被り、赤目・赤髪が良く目立ち遠くにも気が付きそうな少女の声。

腕についている警備隊特有の星の階級の印からして恐らく警備隊の指揮官に値する人物なのだろう。

少女の声を聞き、部下と思われる男は苦笑いを浮かべ少女の元へと駆けつけてきた。

「で？状況は？」

苛ついているのか少女の声音は低く、腕を組んで忙しく指を動かしている。

そんな少女を宥めるように部下の男は今分かっている情報を簡潔に少女に伝えた。

「一部の車両が爆破によって損害を受けていますが、乗客は全て無事です」

「ふん、つたく……。最近の野盗も過激になってきてるわね。他の情報は？」

「いえ、まだ事情聴取や取調べをしていて……」

「まだ、済んでないの！？あれから一時間ちよつと経ってるでしょが！」

もうしょうがないわね、と少女は顎に手を当て爆破によってぼろぼろになった車両を見つめた。

爆発の威力はあまり強くなかったんだろうが、所々大破してしまっているところがある。

これだけ所々車両が大破していれば修理する金額も計り知れない。もしかしたら列車を買ったほうが安く付く場合もあるだろう。

少女は薙ぎ倒しになったドアを跨いで車内に入った。

床や壁、列車の座席などには銃で撃たれた形跡が残っている。

「よくもまあ、これだけドンパチャって誰一人怪我しなかったものね」

「そりゃ、そうだろうな。後ろの車両は僕達しか乗ってなかったし」

「そうね、それが不幸中の幸いって所かし……っ!？」

少女は後ろにいた人物に驚き即座に振り向いた。

死神と思わせるような黒いコートに包まれたソルドの組織服を着込んでいる青年が二人。

そのうちの黒髪の少年に少女は見覚えがある素振りを見せた。

「あーっ!あんたは!」

「やっぱりそうだったか……」

少女の方は嬉しそうに黒髪の青年 アレンを見つめる。

しかし、当のアレンの方は頭を抱え何処か鬱陶しそうに彼女を見つめていた。

第七話

「この方とはお知り合いなんですか？アレン」

突然の出来事にウィルは口をあんぐりさせており、上手く状況が飲み込めていないらしい。

アレンは嫌そうな表情を浮かべると、目の前にいる少女について説明し始めた。

「ああ、こいつはノエル・イザベラ。まあ、何だ？腐れ縁って奴だな」

吐き捨てるように言うアレンに対して少女　ノエルは気に入らなかつたらしく頬を膨らませ、アレンの背中を少し強く叩いた。まるで鞭を打ったかのように威勢のいい音が辺りに響き渡る。

何が起こったのかと驚き、作業をしていた隊員達はこちらに視線を向けた。

「痛ッ！何するんだお前！」

そんな様子に気づくはずもなくアレンは小さく悲鳴を上げ叩かれた背中を手で擦り、ノエルを睨みつけた。

余程、強く叩かれたのか少し涙目になっている。

そんな彼をノエルはちらりと横目で見やり右手を頭で抱え、はあ…と溜息を付くと、何処か呆れた口調で言葉を続けた。

「もう……違うでしょう！私とアレンは幼馴染なのに……。どうしてそんなに素直になれない訳！　ところで、隣にいる銀髪的美青年の方は？」

ノエルはさっきの膨れっ面の表情から一変、嬉しそうな表情を浮かべ、未だ背中 of 痛みに唸っているアレンの横腹に右肘を突きながらそう尋ねた。

未だに彼は、お前手加減とか知らないのかよ……とぼやきつつも隣に居るウィルを見据えて簡単に紹介をし始めた。

「ウィル・アーヴィン。僕のパートナーだよ」

そう言われ、ウィルは軽くノエルの方を見据え軽く会釈をし、

「ウィル・アーヴィンです。どうぞよろしく」

と長い銀髪を揺らしノエルに向かって微笑を浮かべた。

彼女もそれに倣い、警備隊のシンボルである羽の付いた帽子を取り外し笑顔を浮かべ軽く会釈をする。

「そうなんですか！ いやあ、かつこいいですね……。本当、誰かさんと大違いで」

「何だと？」

ノエルは帽子を持ったまま少し意地悪な笑みを浮かべて、アレンを見やったことに気が付いたのか、未だ背中を擦りながらも彼は彼女をまた睨みつけた。

「まあまあ、お二人さん……」

これ以上不穏な空気にさせないためにも間にウィルが割って入り二人を宥める。ノエルとアレンは未だ不満そうな表情を浮かべながら

も彼の言葉に従うのだった。

「……と言っわけなんだが」

今回のアレシアの事に関しての簡単な説明を終えた後、ノエルは持っていた羽根が付いた帽子を弄びながらアレンの説明を軽く聞き流していたようだった。

あまりにもその態度が聞いているようには思えなかった為、アレンは訝しげな表情を浮かべノエルの方を向いて尋ねる。

「お前、本当に聞いてたのか？」

「聞いてたわよ、ちゃんと。要はあんたがドンパチやらかして列車が使えなくなつてアレシア方面へ行くのが難しくなつたってことですよ？」

「あ、ああ。まあ、そう言っことだな」

アレンは頭の四隅の何処かで言葉に引っ掛かりを覚えながらも頷き帰す。

彼女は情報を統括するのが職業なだけであつて要点要所の所だけは掴めているらしい。

その時、何か閃いたのか彼女の口からとんでもない言葉が発せられた。

「じゃあ……、私の警備隊の車使えば？」

「は？」

一瞬、アレンとウィルは顔を見合わせ驚いた表情を浮かべその場に立ち尽くした。

アレンはあのなあ……とこめかみをビクつかせ右手を頭に当てながらも言葉を続ける。

「僕達が警備隊の車を勝手に乗り回せると思う？第一、他の組織から何か借りる時にはこっちの上の幹部からの許可が必要で……」

「だから、警備隊の中で一番偉い私がいって言ってるじゃない。あなたの組織のお偉いさんには私が話を付けとくから。それでいいでしょ？」

あまりにもノエルの言葉があっけらかんとし過ぎていて二人は黙ってしまふ。

第八話

最初に沈黙を破ったのはウィルだった。彼は少し考えた様子でアレンを見て言葉を紡ぎ始める。

「アレン、此処はお言葉に甘えましょうよ？復旧までいつまで掛かるか分からないですし……」

ウィルの賛成にノエルは嬉しそうな表情を浮かべて彼の腰に肘を突いた。

「あら、銀髪のお兄さんもいいこというじゃない。そうよー。折角私がアレンの為にと思って言ってるのにー」

ノエルの言い方にアレンは内心少しムツとなるが、確かにウィルの言うとおり復旧までにいつまで掛かるか分からないのだ。

此処でじっとしていたらアレシアに着くのが遅くなってしまうだろう。

「はあ……。お前に借りを作るのは嫌だったんだが。状況が状況だしな。頼むよ」

「本当！？じゃあちょっと待っててね！」

まだアレンは何処となく嫌そうな顔を浮かべていたが、ノエルは嬉しそうな表情を浮かべ、すぐさま部下を呼び出し何が何でも直ぐに車を手配するように、と命令したのだった。

数分後。

三人は駅のホームを抜け駅前広場へとやってきた。彼女の命令通り、広場の前の道路には「フィオナ第一警備隊」と書かれた一台の青い車が止まっている。

「本当にありがとうございます。助かりますよ」

「ううん。車一台貸し出すぐらい大丈夫よ。ウィルさん。さ、二人とも乗って乗って。本当は私が運転してあげればいいんだけど、此処の事後処理やらなきゃならないから……」

心の底から本当に申し訳ないと思っているのだろうか、彼女の表情は先ほどとは違い少し沈んで見える。

「ったく……色々大変だろうけれど、無理せず頑張れよ。ノエル」

そんな様子を見兼ねてアレンは後ろを向いたまま彼女に聞こえるか聞こえないぐらいかの声でぼそりと呟いた。

「えっ……？うん……。分かってるよ」

まさかアレンからそんな事を言われると思ってなかったのだろう。ノエルは頬を少し赤らめ俯いたままそう答えた。

そんな二人の様子をウィルは微笑ましく見つめながらも先に車に乗り込む。

実は彼なりの気遣いだったのがアレンは先に置いていかれると思って勘違いをし慌ててウィルの後に続き、車に乗り込んでしまった。折角のチャンスだったのに、とウィルは思いつつも乗ってきたアレンのために右に寄り席を空けドアを閉めた。

二人が乗ったのを運転手は確認した後、エンジンを掛け車を動かす

始める。

そして彼らは車の窓を開け、ノエルの姿が見えなくなるまで手を振り続けたのだった。

第九話

工業的な風景は豊かな田園風景へと変わって行き、再び発展した都市部へと変わっていく。

そして車に揺られて数時間後、アレン達は目的地のアレシアの駅前通りに着いた。

二人は車から降りて運転していたノエルの部下に軽く頭を下げる。手を振り彼らの車が見えなくなった頃、アレンは一呼吸し周りの街の風景を見渡した。

「此処が、アレシアか」

この国の最大の都市「アレシア」

最大都市とあってか辺りにはたくさんビルや店が立ち並んでいた。時刻は既に夜を迎えようとしているが依然として人通りは多く、中核都市・ヴィオラとは一風違った雰囲気醸し出している。

「さて、こんな時刻になったが……。とりあえず行くか」

「そうですね。地図によれば、此処から近いみたいですよ」

二人は持つてきた資料を持ち大通りを抜けていった。

アレン達の服装をあまり見たことが無いのか、通り過ぎる人たちはこちらを見ているが彼らは気にする素振りもなくそのまま歩き進めていく。

「……此処だよな？」

「……みたいですね」

駅前の大通りを抜けると人はまばらにしか居ないがそれでも建物は非常に多い。

いくつかの建物に囲まれて居るその中にミーティア本部が建てられていた。

本部の建物は彼らの想像以上大きく、一体、何階まであるのかと言うほどの大きな高層ビルに近代的なデザインが施された大きな扉が建物の威圧感を出しており、その扉の前には数十人の警備員と思われる人々がこちらを見据えているのだ。

「流石、この国の中枢を図ってる組織は違うよな」

「そう……ですね。こうしてても仕方ないので入りましようか」

「ああ。つたく、こんなに無駄にでかい建物作ってどうするんだって話だよな……」

アレン達はそんな小言を言いながらも一人の警備員に近づいていき、ソルドの者だが、と話し始めた。

既に警備員には話は伝わっているらしく、二人はソルドの身分証明書を彼らに見せた後、閉ざされていた扉を開け中に入っていた。

第十話

建物内に入り受付へ行くと、白いローブを着た二人が彼らを出迎えた。

今回の事情を軽く説明をした後、アレン達は近くにあったエレベーターに乗り込む。

電光板の階数は徐々に増えて行き、やがて最上階の三十階を示したと同時にエレベーターのドアが開いた。

彼らはエレベーターを降りて少し歩くと、細かいデザインが施された茶色いドアが二人の目の前に現れた。

一人の白いローブを着た女性は威圧感のある扉を軽く数回ノックし、失礼します、と声を掛けると同時にドアノブを回し扉を開ける。

「所長、ソルドの方をお連れしてきました」

所長と呼ばれた男はデスクで作業をしていた手を止め、こちらを振り二人に対して笑顔で出迎えた。

この国では珍しい薄い桔梗色の髪・黒い瞳が特徴的で何処か温和な雰囲気を持っているようだ。

彼は二人を席に勧めた後、自らも向かい側に腰を下ろした。

では失礼します、と彼らを此処まで連れてきた二人のミーティアの職員は軽く頭を下げ、静かにドアを閉める。

ドアが完全に閉まったのを見届けると、男は軽く咳払いをし、柔らかい口調で言葉を紡ぎ始めた。

「無理を言って済まなかったね。私はフェリクス・ウィルヘイム。ミーティア幹部の一人だ」

何故、ミーティアの幹部に呼ばれたのかアレン達は内心、驚いたが表情には出さない。

アレン達もフェリクスに簡単な自己紹介を済ませた後、今回の本題である呼ばれた理由について聞くとフェリクスは温和な表情から一変、何処か厳しい表情で二人に話し始めた。

「実は、今、アレシアではミーティアの職員が襲撃される事件が多発しているのだ。

まだ幸いにも死者は出ていないが、今後どうなるか分からない。それに実力者が多数負傷していることもあってこちらとしても人手が足りず困っているのだ。その時に丁度、ソルドに勤めてる親友のアドルフが連絡をくれてな。有力な実力者は居ないかと聞いたら、アレン君とウィル君の名前が上がってきたという訳だ。本来なら他の組織に手を貸してもらうのはご法度に近いことなんだが……。いかにせん、このままいくとこの国の政治や治安にも影響が始めかねない。それで今回の場合は上からの許可が下りたわけなんだ」

なるほど、と彼らは頷いた。

今回は有数な実力者がかなりの危険な状態まで襲撃されるといふこともあってアドルフは浮かない表情をしていたのだろう。

状況を話せばいくら上司の命令とも言えど絶対服従組織ではないため、自分の身を案じて断られる可能性も出てくる。

一呼吸置いた後、フェリクスは二人を見据えて再び言葉を紡ぎ始める。

「今回はこのような仕事な訳なんだが……。引き受けてくれるか？」

「いいですよ。僕達はそのような仕事に慣れてますから。それに折角此処まで来て帰るのも勿体無いですし」

「私も構いませんよ。アレンの意思に従うのみなので」

断られるかどうかかなり心配だったんだろう。

フェリクスは、協力者として既に色んな支部に頼んだけどいい返事が出なくて、これも断られたらどうしようかと思った、と言って苦笑いし、安堵の表情を浮かべほっと胸を撫で下ろした。

第十一話

「ではこれから詳しい仕事内容について説明するんだが……」

フェリクスがアレン達のためにデスクから数枚、資料を取り出していると突然、閉まっていたドアが荒く開いた。

何事かと思いい人はドアが開いた方へと視線を向ける。

そこにいたのはさつきアレン達が案内をして貰った一人の女性職員で、彼女の表情は焦りと混乱に満ちている。

「どうかしたのか？」

フェリクスは彼女の表情を見てただ事ではないと悟ったんだろう。女性は軽く息を整えるとフェリクスの方を見て手短かに話し始めた。

「午後十時頃、第四地区と第七地区で謎の人物達による襲撃があったと警備隊からの連絡が……。とりあえず、警備隊の一部と本部にいる実力者を現場に派遣しました。ですが、余談は許さない状況で……」

「ふむ、そうか……。すまないがアレン君、ウイル君。詳しい仕事内容はまだ話してないが、現場に行つて来て欲しい。君達は腕が立つとアドルフから聞いている。アレン君は第四地区、ウイル君は第七地区に行つてくれないか？」

「分かりました。ウイル行くぞ」

アレン達は立ち上がりコートを翻し、フェリクスからそれぞれ渡された地図を持って部屋を出て行ったのだった。

「今回は別行動だが……、どんな奴がいるか分からない。気をつけるよ」

「そうですね……お互いに無事に帰ってこれるように健闘を祈ります」

くれぐれも無茶はしないで下さいよ、とウィルは言葉を付け足してアレンとは反対方向の道へと進み始めた。

アレンもまた第四地区に向かうため、地図を見比べながら早足で進めていく。

第四地区は第一区間に当たるブロード地区とは違い、明かりも少なく辺りは寂れた倉庫や道が入り組んでいるだけであり真つ暗な暗闇の中では不気味さが増してくるよう感じる。

「恐らくこの辺のはず……」

入り組んだ路地に足を進めているとふと地面の感触が気になった。

さっきまでは無かった感触だったからである。

雨が降っている訳でもないのに地面は濡れており、触ってみると少し粘り気がある。

アレンのように数々の実戦経験者であればその液体が何を示しているのか直ぐに見当がついた。

「もしかして……。これは血痕……!!」

何らかの動物の血痕である可能性も否めない。

しかし、今は場合が場合である。

何者かがこの場所で誰かを傷付けられた可能性の方が大きいだろう。すぐさまアレンは駆け出し、地面に落ちている血痕の跡を追っていく。

暫くしてついた場所は少し広い路地裏だった。

この場所についていた電灯は切れてしまったのか明かりはなく闇に包まれている。

アレンは腰に収めている携帯用の電灯を取り出し明かりを付けた。

「なっ……!!」

光に照らされた路地裏に広がる光景はあまりにも異様だった。

ミーティアの人々が着ていた白いローブは、真っ赤に染まり数十人全てが地面に倒れていたからだ。

そしてその奥で右耳に十字架のピアスをした灰色の髪をした男が優雅にこちらを見ていたのである。

第十二話

「やっとお仲間さんの登場か。あーあ、ずっと待たされて退屈してたんだぜ？」

背筋が凍るぐらいに不気味な笑みを浮かべながら男は一步ずつアレンに近づいてきた。

彼はその様子に怯むことなく男を睨みつけながら、愛用の二丁拳銃を取り出し、銃口を突きつける。

「お前がやったのか？ともかく、このままお前を逃がすわけにはいかないんでね」

「逃がす訳には行かない？その言葉そのままそっくり返してやるぜ？」

男の口元が歪んだ瞬間。

彼は素早い動作で、着込んでいた黒コートの中から数本の投げナイフを手に取りアレンの方に投げつけた。アレンは横に飛び、ナイフを避けて男の方に弾丸を撃ち込んだ。

その途中に後ろの方にあつた箱がナイフによつて壊され、当のアレンは気にせず横に飛んでいくが、男はまるで銃を向けられているとは思えないほどの動きで軽々と銃弾の雨を避けていく。

やがて撃ち続けていたアレンの弾は切れ、常時装備してある代えの弾丸を手馴れた手つきで直ぐに変える。

銃を向けたままアレンは冷たい目で見据えるが、その様子に男は怯む様子も無い。

「中々いい腕前をしているな。だが……。俺に当たったことが運の尽きだったな」

「何だと……？　っ！」

恐らくほんの一瞬の出来事だっただろう。

男がそう言った瞬間、アレンの両腕に激痛が走り、思わず銃を落としそうになるが何とか力を入れて持ち直した。

自分の腕を見てみると両腕からは血が流れ、大きな切り傷が数本ついている。

そのナイフは男の方へと向かい、彼の手には血のついたナイフが数本握られていた。

「なっ……！まさか！？ナイフが戻ってきた!？」

ありえない、とアレンは腕から流れている血を押えながらそう呟いた。

一度投げたナイフが投げた本人の意思で戻すことは物理的に不可能だ。

驚いているアレンをよそに男は次々とナイフを投げていく。

アレンは投げられてくるナイフをかわすが避けたいうちの一本が右腕に突き刺さった。

突き刺さる激しい痛みになんとか堪えて構えるが、上手く右腕が上がらず弾丸を放つことが出来ない。

余り深い傷を負っていない左腕で銃を撃ち続けるが、さっきよりもはるかに命中度は落ちている。

「どうした？さっきより動きが鈍くなってるぜ？ま、そのぐらいの傷を負って放置してたら最悪死ぬかもなあ」

手元のナイフを空中で弄び、何処か楽しそうな表情を浮かべた男の言葉にアレンの表情には焦りが見え始める。このまま戦ってはまともにも勝てないだろう。

肩で息をしているアレンに、先ほど破壊された木箱が目に入った。中身は既に零れており、黒い粉が地面に散らばっていた。

(確かあの箱は……。これなら……。いける!)

アレンは自分の銃と服を見比べ、敵に背を向け走り始めた。

予想外の行動だったのか男は少し驚きの表情を見せながらも、直ぐに歪んだ表情を戻しナイフを投げつける。

「やられすぎて気が狂っちゃったのか？逃げようたって無駄だぜ？」

男の容赦ないナイフの雨が降り注ぐがアレンは敵に背を向け、ひたすら来た道を走り続ける。

アレンはある程度距離が離れた所で持っていた二丁拳銃をすぐさま取り出し、箱の方へと打ち込んだ。

彼が打った弾は男をすり抜け箱に当たり、直ぐに火花を散らしてとてつもない爆音が周りに響き渡った。

その衝撃でアレンは身を崩すが何とか体勢を整える。

やがて爆風が収まり視界が良くなって、アレンが周りを見渡すと一人の男が地面にうずくまっていた。

さっきまで余裕の表情を浮かべていた男は苦しそうに胸を押さえて荒い息遣いをしている。

「どうだ？さっきまでなぶり殺していた相手に殺されそうになった気分は」

アレンは右腕の痛みには耐えながら、数歩歩いて男に近づいて見下ろし拳銃を突きつける。その目には何も感情が宿っていない。

「この俺が、お前に負けてるとでも言いたいのか？」

「そつだ。お前は油断しすぎなんだ。あの中には火薬が入ってるね。僕を殺そうとするのに夢中になってたお前は気が付かなかつたみたいだな。とりあえずお前はこちらのソルドの権限に置いて身柄を拘束させてもらおうか」

アレンは拳銃を突きつけたまま男が持っていたナイフを全て奪い取る。

しかし、男はその様子にただひたすら笑っただけで、その様子はあまりにも不気味だ。

「何がおかしい」

「いや……これ以上おかしいことはないだろうねー。お前は詰めが甘すぎるんだよ」

「っー」

その瞬間、路地に何らかの煙が充満し始めた。白い濃い煙でアレンの視界が薄れていく。しまった、と彼が思う間にはもう遅く、充満していた白い霧が晴れた後、男は姿を消していた。

「くそ……みすみす敵を逃しちまったって訳か……」

アレンは悔しそうな表情を浮かべながらさっきまで男がいた場所をただ呆然と見ているしかなかった。

第十三話

「あら、もうこんなところまで来ちゃったのねー」

満月の夜。

雲ひとつない夜空に、女の金髪がゆらりと風に靡いた。

肌が白くとても綺麗な顔立ちに対して、彼女の表情は狂気に満ちており戦いに慣れない一般人が見たらその雰囲気には圧倒されるだろう。此処はアレンがいるブロード地区とは真反対に位置するシルビア地区。

周りを照らしているのは月の光だけという暗い路地の真ん中に女が不敵な笑みを浮かべ、退屈そうにウィルを見つめているところだった。

ウィルは薄明かりに照らされた女の顔を見て表情が一変する。

「貴女は、あの時の」

「ああ、何処かで見たと思ったたらあの時の少年だったのね。殺しそこねて行方を捜してただけで見つからなかった。でも、まさかこんなところで会えるとはね」

何処か憂いに満ちている女の顔を見てウィルは奥歯を噛み締めた。

あの時、彼は女の行方をしらみつぶしに捜してたからだ。

「貴女の顔は一度たりとも忘れたことはありませんよ。十八年前のあの日からね」

「十八年前のあの日……ねえ。あの時の貴方はとても歪んだ表情を浮かべていてもっとなぶり殺しに」

「黙れ！」

いつもの彼らしくない言葉を女に言い放って睨みつけ、ウィルは咄嗟に腰にかけてあった二本の剣を手に取り女に向かって走り始めた。やれやれといった表情で女も背中に挿してある大剣を取り出し彼と刃を交じり合わせる。

「生憎、私はそんなに暇じゃないのよねー。貴方の相手なんかしてられないわ」

そう言っただけで彼女は横一文字に剣を振り彼の二本の剣を薙ぎ払う。女の力といえども大剣の影響でかなりの力が加わっているためウィルは体勢を崩すが、直ぐに立ち直し構えた。もう一度、彼は女の方へ真正面へ向かって走り出す。

「真正面から来るなんて……。芸がないわよ」

彼女はそんな軽口を叩きながらウィルの攻撃を避けようとした。だが、ウィルは後一步で彼女に近づこうとした瞬間、彼の姿が高速移動したように一瞬消えてしまった。

女が一瞬戸惑い、ウィルの攻撃に気が付いて上を見上げたときには彼の剣が女の腹を掠めていた。咄嗟に急所を外したらしく、多少痛みにも表情を崩しながらも大剣を地面に突き刺し体を起こした。

「風の噂で剣流が得意だとは聞いてたけど……中々やるじゃない。ちょっと私も貴方のことを甘く見てたわ。でも……、これなら私の方が上よ」

「っ!？」

突如、彼女の姿が一瞬消えた。

無論、実際には消えてはいない。彼女の姿を目が追いつかずに見えるだけだ。

突如、ただならぬ寒気を感じ彼は後ろに飛んだが、避け切れなかつたらしく彼の左頬に一筋の血が流れ落ちる。

「あら、これを避けるなんて……。貴方が初めてだわ。私を本気にさせた以上 責任はちゃんと取りなさいよ？」

殺気と狂気を含んだ冷たい笑いを浮かべ女はウィルに向かって大剣を振り回す。

ウィルは彼女の攻撃を避ける事に必死だった。

確かに彼の剣術は一流の腕前だ。

しかし、目の前にいる彼女の剣術は彼以上の実力を持っている。

特に反撃・攻撃のスピードに関しては女の方が上だろう。

彼が二つの剣で攻撃しようとしても、女はまるで彼の攻撃を読んでるかのように大剣を使い隙ができた部分を狙ってくる。

しかも、急所ばかりは狙わず、まるで蛇をなぶり殺しにするかのようになじわじわと痛めつけていくのだ。

数分の間は彼女の攻撃を流すか避けるかしていた彼も結構な時間が経つにつれて、避ける範囲に限界が出てきたのだろう。

彼が着ていた黒の組織服は段々と切り刻まれていき、所々血がにじみ出ていた。

「そうそう……。もっと私を楽しませてね？」

容赦ない彼女の攻撃。

一瞬、ウィルの足元が纏れてしまったのを彼女は逃さなかった。彼の左手に激痛が走る。

「っ……」

何とか気絶しそうなのを堪え、気力を振り絞りながら残った右手で剣を構えるウィル。

だが、片手だけではさっきよりも防げる場面は少なく自身の気力と体力を持ちこたえるのに精一杯だった。

彼女と刃を重ねてどのぐらい時間が経ったのだろうか。

既にウィルのコートはボロボロになっており、辺りは彼の血でまみれていた。

これだけの傷を負っていたら何時倒れてもおかしくないだろう。

女も、中々上手くないことにじれったさを感じたのか大剣を片手で構えて彼に向かってこう言い放つ。

「もうそろそろ終わりにしましょ？」

その掛け声と同時に女は持っていた大剣をいきなりこちらに振り回した。

体の痛みと戦いの中での焦燥感に駆られながらもウィルは右に飛ぶ。彼女はその一瞬の時を待っていたのだろう。

辺りに数発の銃声が響き渡った。

「っ……ぐっ……」

ウィルは痛みには耐え切れずに持っていた剣を地面に落とす、倒れ込んだ。

黒いコートで分かりづらいが銃弾は彼の右腕と肩を貫通してしまっ

ている。

「私が銃を使えないとでも思った？」

女は多少、疲労の色を見せながらも不気味に笑っていた。

そして、限界を迎えた彼の元へと歩み進めて持っていた拳銃を彼のこめかみに押さえつける。

「こんなに私と対等に戦えたのは貴方が初めてよ。……でも、残念だったわね。貴方は所詮その程度。私には勝てないのよ。そうね、此処まで戦えた貴方にご褒美。何か言い残すことはあるかしら？」

「言い残すこと……ですか。貴女なんか言うぐらいならそのまま死ぬほうがマシですよ。まあ、もつとも私はむざむざ死ぬつもりはないですしね」

「あら、此処までできて偉く強気ね。……言いたいことはそれだけ？それなら話、聞かないほうが良かったわ。無駄話は此処でおしまい。あの世で父親に会って楽しんできなさいよ」

女はウィルに対してそう吐き捨てて、言葉を切った後、彼に向けて引き金を引こうとした。

その彼女の姿を最期にウィルは目を閉じ、辺りに数発の銃声が響き渡った。

第十四話

？

自分は撃たれたはずだ。何故まだ生きているのだろうか。

意識はまだあるし頭を撃たれた痕跡もない。

不思議に思い目を開けてみると彼に銃口を向けていた女が右手を押さえて肩で息をしていた。

撃たれたのはウィルではなく女の方だったのだ。

「うっ……あ……」

咄嗟の出来事に女は理解できずに右手に持っていた銃を手放してしまふ。

そして彼女が後ろを振り返るとそこにはウィルと同じ黒いコートに身を包んだ男が冷たい目で敵を見下ろし拳銃を構えていた。

右腕の傷が痛むのか肩で息をしつつも、月明かりに黒髪を靡かせ燃え上がるような真紅の瞳を見据えてコートを翻し、冷たい眼差しでこちらを睨み付ける。

その人物の事をウィルは良く知っていた。

「アレン！」

アレンは辛そうに息をしている彼の方に目配せをすると直ぐに女の方に視線を戻した。

そして、躊躇なく、彼女に向かって数発弾丸を撃ち込むが、対する女は物ともせず大剣を振りかざし弾き返す。

「ちっ……厄介だな」

アレンはそう言うと、銃を後ろに納め、左手で腰につけてある短剣を数本取り出して女に投げつける。

当然のことながら女は大きく横に避けて大剣を使い叩き落とすが、それこそが彼の狙いだった。

女が投げられてきた短剣の方に意識が向いている一瞬の隙に、アレンの腰に収められている銀色と黒色の入り混じったの長剣を取り出し一気に詰め寄る。

彼の攻撃は利き手より精度が落ちるらしく、女の足元を軽く掠めただけで決定的な致命傷には至らない。それでも不意の攻撃は効いたのか、彼女の動きが若干鈍くなったように思える。

「ふっ……、あなたのお仲間も中々やるじゃない。もっとお相手してあげたいけど……」。

さすがに今回は二対一じゃ、分が悪すぎたわね。また今度、相手してあげるわ」

アレンが声を掛け、女の下へ寄ろうとしたとき辺りに白い煙が充満し始めた。

そして、霧が晴れてアレン達の視界が良くなった頃……。地面に若干の血液痕を残したまま、女の姿は消えていた。

アレンは彼女を追おうとしたが、先ほどの戦いで体力がかなり消耗し上手く体に力が入らない。

それにウィルの事もあり、追撃するのを諦めた。

アレンは持っていた携帯電話で現在位置と逃走者の追撃、けが人がいるので緊急に救急隊を呼ぶよう仲間に伝えると、全身血まみれになっているウィルの元へと駆け寄った。

「大丈夫か！？おい、しっかりしろ！」

彼の体からは大量に血液が流れており、一刻も争う状況までに悪化して息遣いも荒い。

アレンは着ていたコートを脱いで生地の一部を歯で引きちぎり、右手の痛みを堪えながらも血が流れ出ている所を縛り止血していく。

「すみません……。私はアレンの補佐なのに守ることさえ……」

「今回は相手が異常すぎた。ただそれだけの事だ」

「でも……」

「今はそれ以上何も言っな！」

あまりの剣幕に何か眩こうとしたウィルは黙ってしまふ。

数分後、路地近くからサイレンの音が鳴り響いてくる。

そして救急隊が到着した後、すぐさま彼らは近くの大型病院へと搬送されていった。

第十五話

「？」

ベットの中に入り、夢の世界へと落ちようとしていた幼い少年の耳に聞こえてきたのは微かな物音。

枕元に置いてある時計の時刻を見ると既に午前零時を回っていた。

「お父さん？」

この家には母親や他の兄弟は居ない。

母親は既に帰らぬ人となっており、彼以外に兄弟も存在しないからだ。

彼は部屋を出て、一階に降り物音がするリビングの方へ向かって歩いていきそつと足を進めて階段を降りていく。

だが、不思議なことに辺りの部屋の電気すら一つも付いていない。

(やつぱり、気のせいだったのかな……)

お気に入りであるくまのぬいぐるみを胸に抱きかかえたまま彼はそう考え

もう一度、上へ上がろうとしたその時、更に大きな物音がリビングの方から聞こえてきた。

誰だろう、と思いつつドアをそつと開け周りを見渡す。

明かりは付いておらず漆黒の闇が部屋一面を支配している中、手探りで部屋の電気のスイッチを探し出し電気を付けた。

だが、その瞬間思いもよらぬ光景が少年の目に映った。

一人の男性が血の海の中に横たわっているのである。

少年は驚きと恐怖に襲われながらも、倒れている男性に向かって走り出し近づく。

「お父さん！ねえ、お父さんってば！」

いくら少年が呼びかけても彼の父親と思われる人物は全く反応を示さない。

少年の目からは涙が溢れ、彼の衣服に雫が落ちていく。

「あら……。こいつ、子供まで居たのね……」

部屋の中に響き渡る、女のハスキーボイスの声。

少年はおそるおそる振り返る。

そこには全身真っ黒の服に包まれ、サングラスをかけた長身の女が立っていた。

唇には赤い口紅を塗っており、何処か妖艶な感じを醸し出している。スタイルもかなり良く、恐らくサングラスを外したらかなりの美人の分類に入る人ではないだろうか。

ただ、彼女の手には拳銃が握られており普通の人間ではないことは少年でも理解は出来た。

「あつ……。あつ……」

恐怖のあまり、少年は叫び声も上げれずただ呻き声を漏らすだけだ。そんな少年を見て女はフツと笑みを零し銃口を向けた。

「大丈夫よ。直ぐに貴方のパパの下へと逝かせてあげるから」

女は少年へ近づいていくが、少年は恐怖心に襲われながらも一歩ずつ後ろへと下がっていく。

そして少年が後ろの壁にぶち当たったとき、女は何処か楽しそうな表情で彼のこめかみに銃口を当てた。

「さあ、もう逃げられないわよ。ほら、最後まで笑いよ。今から貴方のお父さんにあっちで会えるんだから」

女は躊躇せず……、むしろ何処か嬉しそうに少年に向かって拳銃の引き金を引こうとした。

「っ……」

何か嫌な事を思い出したかのように、ウィルの顔は不快な表情へと変わっていく。

周りは白い壁に覆われ、所々消毒薬の匂いが鼻につくことから、どうやらアレシアでもかなり大きい病院に搬送されたらしい。

時刻は既に夜中を回っているようだが、依然として近くの部屋では物音が聞こえてくる。

謎の人物達による襲撃事件があったからだろう。

救急的な処置が必要な患者が運ばれているのかも知れない。

彼は体を起こそうとするが麻酔によってか上手く体を動かすことが出来ない。

周りには多数の機械が設置してあることから余程、酷い傷を負っていたのかもしれない。

仕方なくウィルは起き上がるのを諦め、ふと横を見てみると……。

「アレン……」

椅子に寄りかかって寝ているアレンの姿が目映った。

恐らく自分が寝ている間はずっと見ていたのだろうが、今は疲れて熟睡してしまっている。

また、彼の体にも所々包帯が巻かれていることから、ウィルには及ばずともかなりの負傷をしていたのだろう。

そんな状況にも関わらず、アレンは痛みをこらえ看病していたのだろうか、と思うと自然と申し訳なさを感じてしまう。

さて、どうしようか迷っていると、ん……と眠そうに軽く欠伸をして、アレンが目を覚ました。

「ウィル起きたのか……。具合はどうだ？」

「麻酔が効いてるのか分かりませんが痛みはだいぶ少なくなってます。アレンこそ無理しないでちゃんと寝てください」

「僕はかすり傷が増えた程度で済んだからね。大丈夫だ。もう夜中か……。依然としてまだ終わってないんだな」

部屋の外から聞こえる物音や看護婦の声に耳を傾けながらアレンはそう呟いた。

そして、自己嫌悪気味に表情を曇らせる。

「僕達の仕事は、いくら過激派であっても、表向きの仕事はこの国で暮らしてる人々を守る事だ。いくら非常事態だったとはいえ……、人々を守れず、敵を捕まえずにのうのうと帰ってきた自分に凄く腹が立つよ」

ウィルはどう言っているのか分からなかった。

確かに彼の言うとおり自分達は敵を追うことはしなかった。

いや、追う事が出来なかった。

自分達には実力があると信じていたのに、だ。
それを簡単に打ち砕かれてしまった。

これほどまでに無力さを痛感したのは初めてかもしれない。
少し考えて、でも……とウィルはアレンの燃え上がるような真紅の瞳を見つめて言葉を紡ぎ始める。

「私達はやれるべきの事はしたと思います。あれが自分達ではなかったら恐らく……被害はもっと拡大していたでしょうね」

「あれが満足に仕事を守ることができたか？お前はそう思うのか？」
ウィルの意外な言葉にアレンは苛立ちを隠せなかった。
そんな彼の様子にも動じることなく、真っ直ぐと彼を見据えウィルは言葉を続ける。

「勿論、満足に仕事を遂行したとは思ってません。でも、今、あれだけの事が自分達では精一杯なんですよ。悔しいですけどね」

アレンはウィルの瞳に悲しげな表情が宿っていることに気が付いた。
考え方は違えど、ウィルもアレンと同じ気持ちなのだ。

第十六話

「悪い……ちょっと感情が高ぶってしまった」

「いえ……、それはお互い様ですから」

お互いに気まずい空気が流れる。

その時、ドアのノック音が聞こえ扉が開いた。

ドアの方に目を向けるとミーティアの幹部であるフェリクスと彼らの上司のアドルフの二人が入ってきた。

アドルフの方は報告を聞いて駆けつけたのだろう。

その表情はとても固い。

「二人とも大丈夫か？」

アドルフは心配したような声音で彼らを見るが、どうみても大丈夫な様子ではない姿を見て苦々しい表情を浮かべる。

その姿を見て、アレンは痛まれないと思ったのか微笑し茶化すような口調で言った。

「大丈夫ですよ、二人とも無事ですから。なあ、ウィル？」

「ええ。見た目は結構痛々しいですけど、大したことはありませんから……」

彼のその姿を見て、意図に気がついたのかウィルも合わせるように頷く。

だが、二人の思いとは裏腹にアドルフは突如、彼らを睨み付け怒鳴り始めた。

「何が大丈夫だ！お前ら無理してるんだろっ！？二人とも顔は笑ってるが目が笑ってない。

特にウイル、お前は痛みで顔が引きつってる！

人がどれだけ心配したと思ったら二人揃ってヘラヘラ笑いやがって……！」

アドルフは感情の自制が利かなくなってしまったのか、アレンの右頬に平手で一発打ち付けた。

アレンやウイルは突然の状況に目を開き、隣に居たフェリクスもまさかそんな事するとは思わなかった様子で彼を見ている。

ウイルの方にも一発撃とうとしたのをすかさずフェリクスは我に返り、上がったアドルフの手を掴んで止めた。

「フェリクス、何するんだ！こいつらは俺の気持ちも知らずに……！」

「アドルフ、まずは落ち着くんだ」

静かな声音でアドルフを諭す。

彼はまだ納得してない表情を浮かべながらも手を下ろした。

一呼吸置き、フェリクスは話始める。

「アレン君たちは辛い表情を見せてアドルフを心配させたくなかったんだよ。

だからああやって自分たちは大丈夫だよ、って笑ってたんだよ。

自分のせいで彼らを此処まで傷つけたと責任に駆られてるお前の辛い顔を見たくないなりの彼らの気遣いだ」

冷静になったアドルフは今、自分がしかした事を思い出すと羞恥

で顔が赤くなった。

彼らは辛いながらも自分に此処まで気を使ってくれていたのか。そう思うと涙が出そうになるが、此処はぐっところえて彼らを見つめる。

そして、アレンの頬に手をかざして一言呟いた。

「いきなり頬を叩いて済まなかった。叩いた俺が言うのもなんだが、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ、そこまで柔に訓練に臨んでませんから。気にしないで下さい」

アレンはそういってアドルフに笑いかける。

その後、どうしたらいいのか分からずアドルフはバツの悪そうな顔をし、目を泳がせる。

そして半ばやけくそ気味にこう言い放った。

「二人とも何か食べたい物はあるか？さっきの詫びだ。俺が買ってきてやる！何でも言え！」

まさかそんな発言が出るとは思わなかったのか彼らは一瞬驚いた顔を浮かべたが、

直ぐに表情を戻し、それなら……と彼らは口々に自分が今欲しい食べ物物の希望を言い始めた。

「本当ですか？じゃあ、僕は特大プリンに、チョコレートケーキ、チーズケーキ、モンブラン、後、最近、巷で流行ってるお隣のデザート、杏仁豆腐って言うのも食べてみたいです！ウィル、お前は何にする？」

「そうですね……。私は今、こんな状態なので……。食べやすい食べ物がいいですね。プリンとかゼリーとか」

現在の時刻は深夜を回っている。

開いている店といえはかなり限られてくるだろう。

確かに何でも買ってくるとは言ったが今の状況を照らし合わせてみて、限度というものは分からないのだろうか……。と、アドルフは一回ため息をつきながらも、彼らの注文を一つ残らずメモに取っている。

「まったく、こいつらだけは……。特にアレン、お前そんなに食べてたら太るぞ。」

それじゃ買いに行ってくるからな。フェリクス、今この時間に開いている店屋は何処にあるんだ？この国最大の都市だったらこのぐらいの注文を揃えられる所あるだろう？分かったらとつと教えて案内しやがれ」

「本当に君は素直じゃないんだから……。いいよ、付き合おう」

恥ずかしいのか、アドルフの横暴な言い方にフェリクスは苦笑いを浮かべつつも二人は彼らの希望のデザートを買いに行くため部屋を出て行ったのだった。

第十七話

アレンとウィルが病院に收容されていた同時刻。
アレシアとの境に当たるダヴィド郊外のとある廃屋で二人の男女が話をしていた。

窓の外から見やっても遠くからでもあちこちで緊急用の明かり飛び交い、混乱しているアレシアの様子がよく分かる。

この廃屋は周りは程よい高さの森に囲まれている為、身を隠すには丁度よく、こうして監視する場所として使用されていた。

「んー、向こうもいい感じになってきてるわねえ……。まあ、あのソルドの二人が出てきたのはちょっと想定外だったけど」

金髪を揺らしながら吸い込まれるような碧眼で外を見やりつつ、自分のわき腹に薬を塗って包帯を巻きながらそう呟く。

それを見ていた灰色の髪の男は手伝おうか？と手を差し出すが、女はことごとく拒否をした。

「いいわよ、このぐらい“フセヴォロド”でもつけておけば治るわ。この薬は切り傷の治療薬として最速に細胞を活性化させて塞ぐ力のある薬なんだから。それより私は貴方のほうがよっぽど重症に思えるのだけれど？」

手を差し出した男の手や体は傷だらけになっていた。
服もぼろ雑巾のように擦り切れてしまっている。

だが、男は別に大丈夫だ、と女に背を向けた。

「ふん……、折角人が親切に手を差し伸べてやったというのに。このぐらい大丈夫だ。」

それより、あの計画は順調に進んでいるか？」

「私を誰だと思ってるの？ 仮にも組織の重要四大幹部なのよ？ 順調に進んでなきゃおかしくなくて？」

「毎回のお前のその言い方が気に入らないが。まあいい、これからどうする」

「そうねえ……。あの二人、邪魔はされたけど重要な人材だったりするのよね。それをむざむざと無駄にはしたくないし。まずは計画を第一段階から第二段階へ進める餌がいるわね」

女は少し痛みにも顔を歪ませながらもきつく包帯を巻きつけた。まだ完全には塞がっていないのか包帯には血が滲んでいる。

「その餌を持ってきて頂戴。私は別ルートで計画を実行させるエネルギーを持ってきて完成させるから」

「分かった。私はあの人の為に全力をつくしているような物だからな。餌となる人物を組織本部に連れてくる。またその時に向こうで落ち合おう」

男は身を翻しドアに手をかけて向こうの道へと歩き始めた。

そして自分が持っていた短刀を数本手に取った後、五芒星のようになるよう一本ずつ地面に突き刺し目を瞑った。

刺したナイフの場所からは眩いばかりの光量が発せられ、地面に手をついた瞬間、そこに居た男の姿は完全に消えてしまっていた。

その姿を見送った彼女は少し唾を吐き捨て、忌々しそうに自分の愛剣を地面に突き刺してそれにもたれる。

「あの人に全力を尽くす……ねえ。残念ね、貴方はあの人にそのまま信用されてなかったりするの。それを知らないなんて愚かなのかしらね」

女は大剣を突き刺したまま、妖艶な笑みを浮かべながら手元にあった鋏を弄ぶ。

そしてその鋏を横に投げて数回転させた後、壁に掛けてあった写真に突き刺した。

その写真にはさっきの男の姿が写っており、空いた白い部分には筆記体でセレス・クレメンテと書いてあった。

「次の仕事が終わったら……。貴方はもう用済みなのよ」

写真に向かってそう語りながら痛むわき腹を押さえながら椅子から立ち上がり

自分の愛用武器である大剣を背負った女はまるでこの仕事を楽しむかのように闇が広がる暗い森の中へと足を進めていった。

第十八話

翌日、アレシア市内は混乱に満ちていた。

突然の襲撃とあって市民は不安を隠しきれない表情で一杯になっており、中にはミーティア本部に詰め寄って暴動を起こしかねない人も出てきたらしいが警備隊が厳しく鎮圧させたらしい。

朝、ウィルは病室においてあるテレビを付けるが、何処のチャンネルも昨日起きたアレシアの郊外地区の襲撃事件で持ちきりであるようで、しばらくしてからリモコンのスイッチを切ってしまった。

未だに麻酔が効いており、傷の状況から見て、特に全身を動けるようなことは出来ないため午前中は暇を持って余しながらも窓の外をしきりに見上げていた。

昼からはアレン達が彼のお見舞いへとやってきた。

その隣にはなぜかフィオナにいたはずの警備隊長のノエル・イザベラも一緒に並んでこちらへ向かってきた。

彼女はお見舞い用に持ってきたフルーツの盛り合わせを机の上に置き、心配そうな表情でウィルの方を見る。

「具合はどうですか？……と言ってもその様子じゃあまり良くないようですね……」

「いや、そんなことは無いですよ。確かにちょっと見た目はショッキングだけど……。たいしたことはないですから」

手をわずかに動かして大丈夫だという意思を伝える。

だが、包帯で固定されている為か、動きは少しぎこちない。

「ったくよ……。朝、泊まってる宿舍の部屋にいきなり乗り込んで

きたと思えば、お見舞いへ行こうだなんて言いやがって……」

アレンはノエルが居るからなのか少し不機嫌な口調でそう言った。その言葉を聞いたノエルは不服と感じたのか彼を睨み付け、声を荒げ言い返す。

「あんた、その言い草は何よ！そりゃ、二人が謎の襲撃犯に襲われたなんて聞いたらこっちはたまったもんじゃないわよ！特にあんたは無茶し過ぎるんだから……」

「だからって言ってもそっちは電報で大丈夫だって打つただろ！わざわざ来るなよ！」

「ちよつと！二人とも落ち着いて……」

いつもは二人の仲裁をしているウィルだが今回に限っては、体を上手く動かすことが出来ずに口で言うしかない。

だが、当の二人は全く聞いてないようで声はだんだん大きくなり話はさらにヒートアップしていく。

「わざわざ来るなんて幼馴染にいう言葉！？大体、あんたは無茶すぎるのよ！毎回私がどれだけ心配してると思ってるの！」

「五月蠅い！お前に心配されることなんかない！」

「はあ！？じゃあ、あんたが昔、連続通り魔に刺されて死にそうになつてたのをずっと看病してたのは誰だっけ？」

「うっ……そりゃお前が勝手に看病してたんだろ！！あの時は看護婦さんも叔父さんも手伝ってくれてたしお前なんかの手伝いは……」

「おい、その二人いい加減にしゃがれ！」

取っ組み合いが始まりそうな寸前、丁度、ドアを開けて入ってきたアドルフのきつい仲裁により二人は驚いて黙ってしまった。

彼に気づく暇も無いほどいきなりきつい拳骨をいきなり喰らったのだ。驚いて黙るのも無理は無いだろう。

眉を吊り上げて睨み付けているアドルフに恐怖を感じたのか二人は黙って下を向くしかない。

「お前らはその歳にもなって何をやってるんだ！場所を考える！ほら、謝れ！」

「えっ……だつてあいつがいきなり……」

その言葉を聞いたアドルフはさらに厳しい表情を向けて二人を睨み付けた。

その目はあまりにも鋭く二人は思わず後ずさりしてしまう。

「だつてもクソもあるか！やらないんだつたらこっちが無理にでもやらずがそつでもいいのか？」

「わ、分かったわよ……。アレン、言いすぎたわ。ごめんなさい」

「こっちもちよつと言い過ぎた。悪かったな」

若干、アレンとノエルはふて腐れた表情を浮かべていたが、二人の謝罪で事が収まり一段落したところでアドルフは近くにあった椅子を引っ張り出し座った。

他の二人も同じようにウィルのベットの周りに椅子を置いて座る。

そしてアドルフは一回咳払いをし、話を紡ぎ始めた。

第十九話

「今はこんなくだらない喧嘩をしてる場合じゃないんでな。勝手に仲裁をさせてもらった。本題に入るが、今日、ミーティア本部で幹部による重要会議が行われた。」

アレシア郊外にある倉庫地区ではいかんせん夜では人通りがほとんど皆無であり、残念ながらからお前達以外目撃者も全く居なかった。だが、アレンが持ち帰った加害者側の一本の投げナイフから一つの情報を得ることが出来た」

アドルフは持つてきた資料を捲り三人にそれを見せた。

資料はカラー写真となっており、セミシヨートで髪の色は灰色・右耳には趣味があまり良いとはいえない大きな十字架のピアスが特徴的である男が映っていた。

その写真を見て男の顔に見覚えがあるのかアレンは何か気がついたように声を少し上げた。

「この男……あの時の」

「ああ。お前が言っていた男の特徴と照らし合わせ、なおかつナイフの出所もあわせるとこの男しか残らない。名前はセレス・クレメンテ。元ミーティアに勤めていた奴だ」

「何だって?」

アレン達は意外な事実に驚きを隠せない。

彼らの反応は予想していたのかアドルフは余計な事は何も言わず話を進めていく。

「昔、技術部に勤めていた奴なんだそうさ。このナイフも精神登録技術を応用して作られた投げナイフであり、体に付けた専用のアクセサリーで自分の意思でナイフを自由自在に動かすことが可能らしい。まあ、簡単に言えばラジコンみたいに離れていても動かすことができるようなものだ」と聞いた。

「そうか、だからあんなことが出来たのか……」

あの時の出来事はなぜ起こったのかやっとな理解できたアレンはなるほどと軽く頷く。

「しかも、この技術を作ったのはセレス本人なんだそうさ。開発者なら応用も容易いだろう。すぐさまミーティア本部は指名手配を掛けている。

こんな技術を持った危ない奴をむざむざと野放しには出来ないだろう。

とりあえず、今日はアレシア全地域に外出禁止令が敷かれ、一般人は安全が確認されるまでは外に出ることは出来ないそうさ。それと、ウィルがなぶり殺しにされそうになった金髪の女については情報が全く出てこない。こちらで全力で探してはいるがもうしばらく掛かりそうさ。すまない」

アドルフに謝られて一瞬どうしていいのか分からなくなったウィルだが直ぐに顔を上げて彼の表情を見据えた。

だが、彼の瞳には悔しいという感情が見て取れその場にいた人々はそれ以上何も言わなかった。いや、言えなかったのが正しいだろう。空気を換えるようにアレンは話題を切り替えてアドルフに話しかけた。

「しかし……なぜ、ミーティアに勤めていた人物がこんな事を？」

「さあな……。反逆者となった理由は本人にしか分からない。たかが技術者がこの国を乗っ取れると思わんしな。調査待ちだ。とりあえず、ウィルは容態が良くなるまでこちらの病院で治療を続行、アレンはこの後すぐさま本部へ来てもらおう。その女の子は直ぐに家に帰れ。一般人には身の安全を確保してもらおう」

一般人と間違えられたのに驚きを隠せなかったんだろう。
ノエルはアドルフに視線を向けて否定した。

「私、一般人じゃないですよ！フィオナの警備隊長のノエル・イザベラよ！私にだって市民を守る義務があるわ！アレンと一緒に仕事させて！」

「何？一般人じゃなかったのか。すまない。しかし……。君は警備隊長なのだろう？此処も大変だが自分の街も守る使命の方がよっぽど大切なんじゃないかい？」

「それはそうだけど……」

ノエルはそう言って黙ってしまふ。

そんな彼女を見越してアドルフはゆっくりとした口調で話しかけた。

「君を待っている部下も居るはずだ。こっちは私達に任せて、フィオナの街の警備に当たって欲しい。彼ら襲撃犯はアレシアを出て他の街へ行っているという可能性もあるんだ。

当然、フィオナが危なくないという保証は無い。だからこそ今の状態を知っている君にフィオナの警備をして欲しいんだ。手口は分かっている。だから人員を増やして対処することも出来るかもしれない。今回は私達ソルドの奴らだったが次は市民に襲ってくるかもしれない。

れない。だからやって欲しいんだ」

「……分かりました。確かにそういわれると私は自分の職務を少しおろそかに考えていたのかもしれませんが。市民を守るためにフィオナに戻ります」

「それでこそ、立派な警備隊長だ。よろしく頼むぞ。帰るのは直ぐの方が良いな。病院の玄関にミーティアの人たちが待っている。事情を話して直ぐに駅へ向かって帰りなさい」

「了解しました！」

そういつてアドルフに敬礼をしアレン達に軽く挨拶を済ませた後、ノエルは部屋を出て行く。アレンは上司の説得力に内心驚きを隠せずこのような説得の仕方もあるんだなと彼の中での上司の評価が上がったのは言うまでも無い。

「あいつを説得するの上手いですね。昔からいうと聞かない子だったのに」

彼のあまりにもざつくばらんとした感想にアドルフは少し笑う。だが、直ぐに表情を戻して穏やかな口調で言い始めた。

「彼女は出来る子だと思う。そしてプライドも高くて周りの人を放つて置けないんだろう。」

自分の父親もそんな感じの人だったからなんとなく分かるんだよ」

「へえ……アドルフさんの父親ってそんな人だったのか……」

「あの人は気になる人がいたらそうやって説得させてたからね。」

もし父親が此処にいたらそう言うこと言ってたのかなって思ったからそう言っただけさ」

「なんか、アドルフさんってファザゴンだったのか……。ちょっと意外だなあ」

薄ら笑いを含めて表情をにやけさせているアレンを見て、アドルフは少し焦った表情を浮かべていた。そして照れ隠しなのかアレンの頬を少しつねって黙らせる。

「痛いですつてば！」

「五月蠅い！お前が余計なことをいうからだ！俺は決してファザゴンなんかじゃないぞ！ただ単に尊敬してるだけだ！つてもうこんな時間じゃないか！そろそろ行くぞ、アレン」

これ以上、アドルフは自分の事を話すのが恥ずかしくなったのだろう。

彼はそういつてアレンの手を引っ張った。

その姿はどう見ても照れ隠しにしか見えず、ウィルは笑いながら、じゃあ、お二人とも頑張ってくださいね、と一言声を掛け、二人はミーティア本部に向かうためドアを開けて出て行った。

第二十話

ウィルのお見舞いを済ませた二人は駅前でノエルと別れ、ミーティア本部へと向かった。

現在、アレシア全域に外出禁止令が敷かれて居る為、街中には誰一人歩いていない。

もっとも唯一歩いているのは街中の警備をしている警護の人々だけで、商店街も大型量販店も飲食店も全て臨時休業の看板を出して店を閉めている。

「僕はにぎやかなより静かなほうが好きだけど、此処まで行くと味気ないな」

「仕方ないだろう。反逆者がうるついているかもしれないんだ。今は組織連中にしか攻撃してないみたいだが、いつ市民に刃を向けるかわからない。外出禁止令を出さざる得ないだろう。もっとも、この国の中で一番安全だと言われていた都市がこの前の事件で神話が崩れたからな。ミーティアとしては何とかしたい一方なんだろうが……」

そんな会話をしつつも二人はミーティア本部の玄関へと歩いていく。現在の本部は以前に比べて嚴重な警備が敷かれているのか、身分証明書その他に入室証明書まで書かされるようになっていた。必要な書類を書き込んだ後、彼らは受付嬢に案内されエレベーターに乗り込み、フェリクスの待つ管理室へと向かっていった。

管理室ではフェリクスの他に二十人程度のミーティアの幹部が集まっていた。

流石、国の中枢を担っている組織だ。このぐらい人数が居ないと各支部を統括するのも大変だろう。

フェリクスは彼らを席に薦めると同時に自らも椅子に腰をかける。そして、それまで話をしてきた幹部達は沈黙し座った彼らに一齐に視線を向けた。

全員揃ったのを確認し、フェリクスは彼らに今回の集まりの目的を話し始めた。

「今回君たちを呼んだのは、証言の聴取と今後の計画の為だ。特にアレン君はセレスに会っている。あの男が一体何をしたのか詳しく事情を聞きたい」

「聴取の為、ですか……」

アレンは予想はしていたのかそれ以上何も言わない。だが、聴取は苦手なのか少し困ったような顔を浮かべる。それを見ていた他の幹部は彼を安心させる為にこう言った。

「大丈夫。聴取と言っても尋問するような真似はしない。神に誓って約束しよう。確かに我らミーティアと過激派ソルドは本来ならば相反している組織だ。しかし、今は緊急事態だ。そんな事を言っている暇は無い。現に、今回の事件で死人が出てしまっているからな」

「分かりました。……それなら聴取を受けても構いません」

「そうと決まったら、アレンは別室に移動してもらおう。アドルフには今後の計画について話を進めておきたい」

了解しました、とアレンは返事をし席を立つ。

そして、ミーティアの書記官に連れられて部屋を出た。

部屋を出た彼をアドルフは軽く目で見送った後、フェリクスに話しかけた。

「で、何故俺が呼ばれたんだ？ミーティアとソルドの合同戦略計画の話をするのであれば、俺の親父を連れて来て話をつければ良いだろう。」

あの人は人事・戦略・主導を束ねている組織の最高責任者のはずだ。俺と一緒にアレシアに来たから市内に居るだろうし、飽くまでも俺の仕事は親父から来た組織の命令を管理する事だ。勝手に部下の主導を取って突っ込む事は基本的には許されていないし、そもそも管轄外だ」

「まあまあ。そうも言わずに私の話を聞いてくれないか、アドルフ」
フェリクスは彼を宥めるような口調で話しかけ始める。

さっきの話で少しざわめいていた幹部達は皆、黙り彼の話を聞き始めた。

「今回君に来てもらったのは、他でもない。君のその管理能力の力を借りたいからだ。」

君の情報管理能力はずば抜けている。訓練学校時代の君はその能力が既に出ていたな。

二年生の時の夏に私の事が好きな女の子の情報がまるっと全部欲しいって言ったら、わずか十分足らずで全て集めてしまったものな……。あれには流石に私も舌を巻くようなものがあって……」

フェリクスがその話をし始めた瞬間、見る見るうちにアドルフの顔は赤くなり、彼を怒鳴りつけた。

「馬鹿！その話はやめろよ！……つまり、俺が今後の計画を上手く

情報統制して各組織の部下達に指示していけばいいのだな？」

「そういう事だ。勿論、今後の合同戦略計画はソルドの組織機関長……君のお父様に伝えておく。ミーティアの幹部が此処と各支部を合わせるとかなりの人数になり、情報統制が難しいのだよ。一度誤報が回ってしまつと修正するのに時間が掛かる。情報の素早さとの確さは君に勝るものはないと思っている。

だから、君を推薦したんだ。今日はその事を話す為に此処に来て貰つたのだよ」

「だったら、ウィルのお見舞いに来たあの時に一言言えばいいものを……」

「いや……まあ、言いそびれてしまつてね。今日、アレン君が証言の聴取に来るのなら、ついでに君も一緒に来てもらおうかと思つて……」

「なんだよ……水臭いな……。分かった、じゃあ、詳細な戦略計画は親父によろしく頼むな。俺は他のソルド支部の様子を見てくるから」

アドルフは他の幹部達にそう伝えて席を外す。

そして、幹部の一人から合同戦略計画の詳細機密文章書類を手渡されフェリクスにお父様によろしく、と一言告げられ管理室を後にした。

第二十一話

アドルフが今後の事について管理室で話をしていた頃。
アレンはミーティアの書記官に連れられて、聴取室へと足を運んでいた。

中に入るとソルド聴取室と同じような質素なテーブルと椅子が対面に並んでいる光景が目に入り、今から尋問を受けるような感覚へ陥るような気がしてならず、彼は少し表情を強張らせていた。

「じゃあ、その席に座ってください」

書記官に促され、アレンは席に座る。

それと同時に書記官は席に座りノートを開いて聴取を始めた。

「ええっと……アレン・ハロルドさんですね。男の攻撃の特徴やその他分かるような事が何かあれば教えていただきたいのですが……」

「男の主な攻撃の特徴は投げナイフでの意思操作ですかね。今知ってること以外で分かることといえば、右耳に十字架のピアスをしていたことと腕に何らかのブレスネットをしていたことですかね」

「十字架のピアスはこちらでも情報がありましたか……ブレスネットですか。それは……うちの中ではまだ聞かない話ですね。他に何かありますか？」

「いえ、それ以外には思い当たらなくて……」

「そうですね。聴取のご協力感謝します。もう戻られても結構ですよ」

案内あつさりと聴取は終了し、アレンはドアを開けて部屋の外に出た。

と、同時にアドルフも話が終わったのか管理室から出てきたようだ。フェリクスと少し何か会話した後、見る見るうちに不機嫌な表情へと変わっていく。

扉が閉まった後、アドルフは玄関に向かう為、エレベーターの所へと歩き始めていた。

「全く……あいつは昔から変わらん。俺がお前のために女の子のデータ集めただけなのに……他の幹部らに勘違いされたらどうするつもりなんだよ……」

「どうしたんですか？」

背後にアレンが居ることに気がつかず、アドルフは驚き躓いて転んでしまった。

その様子が妙におかしくてアレンは笑い始めたが、当のアドルフはますます不機嫌になるばかりだ。

アレンとしてはいつも彼らを纏めているアドルフの焦り具合が気になるが、聞いてもなんでもない、と答えるばかりでこちらとしてはあまり面白くない。

「女の子がどうとかって聞こえたんですけど……何やらかしたんですか？僕、嫌ですよ。ソルドの権限でアドルフさんをわいせつ罪なんかで捕まえるなんて」

「わいせつ罪だと！？んなこと一つもしてないって言ってるだろ！」

さらに機嫌が悪くなり、アレンの頬っぺたを抓り出す。

いつもの倍ぐらいの力で抓ったらしく、ギブ！ギブですから、やめてください！とミーティア本部内で声が響き渡ってしまい、何事かと部屋を飛び出してきたフェリクスが二人に向かって説教をし始めたのは言うまでもない。

彼らが説教から開放されたのはそれから一時間後の事であり、時刻は既に夜の九時を回っていた。

思いのほかフェリクスの説教が長くなってしまったからである。

二人はミーティア本部を出た後、借りているミーティアの寮の部屋に帰る為に暗くなった大通りの道を二人で歩いて並ぶ姿は少し童心に返ったように見えた。

依然として辺りは街灯以外の明かりはなく、寂しい光景が連なっている。

最初に口火を切ったのはアレンだった。

「アドルフさんが怒られるなんて本当に珍しいですね」

「全部お前のせいだろう！お前があんなでかい声で叫ぶから……」

「だって、痛いもんは痛いですよ！それにやったのはアドルフさんだし？僕悪くないですし？」

元の原因を作ったのは確かにアドルフの為、彼に対して反論が出来ず黙り込んでしまう。

そんなアドルフの姿を見かねたアレンは、じゃあ、気晴らしの為にどっかで買って飲みましょうよ！といったもの軽口で言った。

どうせ、真面目なアドルフはいつもの通り、馬鹿かお前は！仕事が優先だろう！と突っ込むだろうと予想していたのだが、返ってきた言葉は思いもよらない返事だった。

「ああ、たまには悪くないかも知れんな。そこの自販機で缶ビール買ってこい」

「本当にいいんですか？」

「いいから、ずべこべ言わず買って来い！」

アドルフにそう怒鳴られ、渡されたお金で缶ビール二つを買ってくる。

そして、近くの公園のベンチに座りそれを彼に渡すと彼はすぐさま缶をあけ一気に飲み干す。その表情はどこか憂いに満ちていた。

「やっぱりビールは美味しいな。つまみがあればもつと良いんだろうが、この状況じゃあな……何日ぶりに酒を飲んだんだろうな」

「まあ、コンビニも全部閉まっちゃってますからね。今あるとすれば自販機だけだし。明日には警報レベルが下げられるみたいですから、店は開き始めるんでしょうけどね……。そんな事言っなんていつものアドルフさんらしくないですよ？」

組織内で一番仕事に厳しいと言われるアドルフがこんな事をするのは珍しい。

いつもと違う彼をアレンが心配するのは無理は無いだろう。

アドルフは一つため息をついて、缶ビールを軽く回しながら何処か吐き捨てるような口調でアレンに言った。

「まあ、上司やってると色々と悩みはあるもんなんだよ……。それでさ、アレン……」

「何ですか？」

いきなり話を振られるとは思わなかったのかアレンは少し驚いたようにアドルフに視線を向ける。
そして、いつもの彼らしくない調子で言葉を紡ぎ始めた。

「俺ってさ……。本当にちゃんとお前らを纏められてるのかな」

「どうしたんですか？急に……」

彼の意外な本音にアレンは驚きを隠せなかった。

アドルフは自分の仕事に誇りを持っている。だからこそ他人にも自分にも厳しい。

その懸命な姿を毎日見ているアレンにとって羨ましくも尊敬できる上司だと思っていたからだ。

当のアドルフはそんなアレンの反応を気にしつつも、少し自嘲的な口調で言葉を続ける。

「いや、お前らってさどんな仕事でもちゃんとこなして無事に帰ってきてたじゃないか。

けど、今回のお前らは瀕死になりながら帰ってきたからさ……。

あの時の姿が目から離れなくて……。自分の可愛い部下があんな姿になって必死に生きようとする姿を見ると自分の存在が怪しくなってきたな。もし、俺がもっと情報を集めて置いたら、お前らに此処まで痛い傷も負わずに済んだかもしれないって思うと……管理長失格だなんて……」

「そんなこと無いですよ！」

あまりの弱音の吐き具合を見かねたのか、アレンは強い口調でアド

ルフの言葉を遮った。

彼は驚いて目を見開いている。

「そんなこと言うなんて……アドルフさんらしくないですよ！僕とウィルにとつてはアドルフさんは憧れの上司です。今回の事件は恐らく、僕達が相手してなきゃ死人が出てました。

そのぐらい強い相手だったんです。情報が集められなかったんじゃない、相手の存在が謎過ぎて情報が出てこなかったんですよ。こればかりは誰にも責める事は出来ない。だからそんな表情で謝らなidekudaisai。あなたの情報管理が素晴らしいのは誰よりも知ってるんだから」

「……そうだな。こんな話をして済まなかった。ただ、俺の役割がずっと不安で仕方なかったんだ……。お前らが俺を必要以上に信頼してるのは良く分かってるからこそ、こうやって打ち明けちゃったのかもしれない……」

「ほんと、アドルフさんらしくないですよ。でも、いつでも僕らは貴方を信頼してますから。第一、アドルフさんの情報処理能力はほんと目に見張るものがあって……っ?」

不安を打ち明けられて安心したのか、アドルフは手に缶ビールを保持ったまま寝てしまっていた。

敵の今後の動きは一切分からない。

だからこそ、アドルフは不安で仕方ないのだろう。

今は安心できる環境をアドルフに作ってあげる必要がある。

その為には自分達が出る限りの努力をしてあげよう。

そう思い立ち、アレンは持っていた缶ビールを一気に飲み干し、近場のゴミ箱に捨てた後、アドルフを背負って帰る為に歩き始めた。

辺りの街灯が少ないせいか、帰る時の夜空はヴィオラで見えていた時

より少しばかり綺麗に輝いていたように見えた。

第二十二話

アドルフを背負って寮の二人部屋に帰ったアレンは彼をベッドの上に寝かせた後、何気なく自分の携帯を開いた。

一件メールが着ている。

どうやら送り主はノエルらしい。

内容を見てみると、無事に自分が住んでいるフィオナの駅に着いたということだった。

ノエルが無事に着いたことにほっと胸を撫で下ろしつつ、彼女への返信へは明日にしようと思携帯を閉じた後、アレンは自分の上のベットへと横になった。

よほど疲れていたのか、彼は寝転んだ瞬間、瞼が重くなり気がついたら寝てしまっていた。

翌朝。

目が覚めたのは朝の十時を過ぎてからだ。

此処最近の仕事ばかりで、お酒を飲む暇がなく、久々に飲んだせいか少し体が重たい。

意外にもアレンが目を覚まして起き上がった時には既にアドルフは支度を始めていた。

アドルフは気が付いたのか仕事の資料に目を通しながらも彼の方を見やった。

「起きたのか」

「それはこっちの台詞ですよ。公園で酔って寝てしまった人の方が早く起きてるってどうい事ですか」

アレンは少し苦笑いを浮かべた。

その様子をみたアドルフは確かに何でだろうな、と軽く笑い、言葉を続ける。

「昔から父親の仕事の関係上、早起きすることが多くてな。それで身についたのかもしれない。昨日はその……すまなかった」

「いえ……管理職ゆえの悩みだったんでしようし。いつもアドルフさんは僕の悩みを聞いてくれてるんだし、お相子ですよ。それより父親の仕事の関係上？折角の機会だから聞きますけど、アドルフさんの父親ってどんな仕事してるんですか？」

「ん？そういえば、話をしていなかったか。俺の父親はとある組織の管理職でな。主に人事を担当してた。彼の洞察力は並知れぬ物があつて、連れて来た人間はとてつもない能力を持った人間ばかりだった。それに他人の事に首突っ込むのが凄く好きで」

その時、ドアのノック音が部屋に鳴り響いた。

アドルフは手持ちの資料を机の上におき、ドアの小さな窓を少し覗いてから扉を開いた。

扉の前に現れたのは煌びやかな黒髪を靡かせ、アレンと同じ組織服に身を包んだ男性だった。

初老を超えているであろうその男はアドルフの姿を見た瞬間、にこやかな表情を浮かべる。

「おお、部屋に居たか。いつも時間に厳しいアドルフが現れないからどうしたのかと思って探したんだぞ。昼から仕事の打ち合わせがあるから早めに来て欲しいんだが　っ？」

男性はアドルフの横に居たアレンに気がついたのだろう。

それと同時にアレンも嬉しさと驚きが混じった表情を浮かべ笑顔で

彼に近寄っていく。

「ミランさん！久しぶりです！国立アルマヴィオラ学校の入学試験以来ですね」

「おお、アレン。そうだな、あの時以来だな……。もうあれから三年経つのか。時が経つのは早いものだ」

「おい……。父さん、アレンを知っているのか？」

互いが顔見知りだったことにアドルフは少し驚いている。

だが、当のアレンはそのことよりも今、彼がいった言葉を聞き返さずにはいられなかった。

「アドルフさん今なんて……。？父さん？」

「ああ、ミラン・クライドは俺の父親だよ。それより何故、アレンが父さんを知っている？」

訝しげな表情を浮かべたアドルフを見て、ミランは簡単に説明を始めた。

「アレン君は昔、私が人事部時代に組織にスカウトした一人だね。その時に彼と出会ったのだよ。もっとも、それ以降、役職関係上出会ったことはなかったがね」

「なるほど……。父さんがあの時話していたのはアレンの事だったのか……」

「そういう事だ。さて、そろそろ世間話もこのぐらいにして出かけ

ようか。

アドルフ、やはり君が居ないと仕事は円滑には進められない」

「分かった。直ぐに準備する」

アドルフはそういつて机の上の資料を片付け、鞆の中に収めた。

そして、小型ナイフや警棒などの必要な道具を全て服の中や腰に納めた後、靴を履いてアレンに背を向ける。

「俺は父さんと打ち合わせに行ってくる。アレンは昨日打ち合わせで指示されたとおり、ウィルの容態の確認と街の警備に当たってくれ」

「了解しました」

二人が出て行くのを見送ったアレンは一息ついて椅子に座った。

そして、遅めの朝食を摂った後、組織服に着替えて襟をきちんと正す。

必要な道具類を全て腰に収め、鍵が閉まっていることを確認してから、今日の仕事に当たる為アレンは寮の部屋を後にした。

第二十三話

いつもより日照りが強いせいかととても暑く感じる。

今日から禁止令は解除され、大通りに面した店屋や露店も営業を再開したようだ。

襲撃の影響からか人はまだ少なめだが確実に以前のような日常生活の風景に戻りつつある。

彼らは寮を出た後、大通りに面して賑わっている商店街のほうへと足を運んでいた。

「彼には教えていないのかね？」

ミランは歩みを止めることなく、役職に似合わない軽い口調で彼に聞いた。

彼はそんな父親の姿に一瞬表情が崩れるが、直ぐにいつもの強張らせている表情に戻す。

「教えていないのかって……。父さんがそんな事を言うとは思わなかったな。」

元々、父さんの存在を知っているのは組織の中でもごく一部の上層部のみだし……」

彼の返答を予想していたのか、ミランはまあ、普通はそうだろうなと軽く頷いた。

そして一呼吸を置いて、言葉を続ける。

「でも、アレン君が私の正体を知ったら驚くだろうな。まさか自分の組織のトップの人だとは夢にも思わないだろう」

「ああ、アレンは父さんの事を未だに人事部の人だと思い込んでるからな。まあ、今はその方がいいんじゃないのか？あいつに余計な情報を入れないほうが物事が捗る」

「おいおい、アドルフにしちゃ冷たいことを言うんだな。もっと部下に情報を与えるのが好きなのかと思っっていたよ」

彼の言葉に意外だったのかミランは少し驚いた。

確かに部下にいつも厳しくしている彼のこの発言は日常生活での行いと少し矛盾しているように見えたからだろう。

しかし、当のアドルフはその姿を見て彼らしくない不思議そうな表情を浮かべる。

「意外？そうか？必要最低限の情報を与えて指示させるのが一番効率がいいことは明白だ。

変に要らない知識を増やして、作戦の妨げになったらそれこそ本末転倒だろう？」

「ほう……アドルフはそういう考えなのかね。私だったら上司として出来る限り最新の情報を与えて、部下に取捨選択させる方法が一番いいと思うがね。

確かに情報が多すぎると混乱してしまい、嘘の事も本当に見えてしまっただろう。

だがしかし、その方が考える力や見抜く力が伸びるし、上司に頼りっぱなしになってしまう駄目な部下になるリスクも少なくなる。

時には上司の判断が仰げず、独断で実行しなければならぬ時もあるだろうからね。

勿論、それは稀な話で、部下では担えない問題を解決に導くように上司は努力しなければならぬと思うけれどね」

彼の言葉にアドルフは少し面を食らったようだ。

いつものアドルフとは少し違った。まるで、プライベートの時に父親と話すような柔らかい表情を浮かべているようだ。

そして、彼は静かに笑い始めた。

「なるほどね……。俺はまだ父さんには勝てないわけだ。また今度の機会に徹底的に戦略について話をしたいものだ」

フィオナの第一警備隊長を務めているノエル・イザベラは机の上に置いてある大量の書類の整理をこなしていた。

彼女はフィオナに帰った後、眠りにつく時間が短かったのか少し眠そうに見える。

だが、彼女の中のプライドが居眠りという行為を許さない。

机の上には缶コーヒーが数本置かれており、眠気覚ましのためにたくさん飲んだようだ。その効果はあまり現れていないようだ。

整理しているその書類の中には、アレン達関わった『列車襲撃事件』や、先日起こった『アレシア襲撃事件』の事についても書いてあった。

彼女は書類整理に疲れたのか軽く背伸びをして、立ち上がり腕を軽く回した。

「あー、つたく、列車襲撃事件の犯人らが捕まったのはいいけど、まだ事情を話していない奴がいるから嫌になっちゃう。

早く聴取が終わらないと、裁判にも掛けられないんだよね。それから先は警備隊じゃなくて司法の仕事だけど、それまでの過程を終わらせないと終日残業続きで困るわね……」

そんな独り言を呟きつつも、仕事を再開させようと再び椅子に腰を

掛ける。

作業を始めようとしたその時、彼女の部屋のドアのノック音が響き渡った。

『隊長、少し宜しいでしょうか？』

ドア越しに聞こえた声はいつも聞きなれた声だった。

彼女はどうぞ、と返事をする、彼女より少し若いであろう、金髪の青年が目の前に現れた。

「ベリエス、どうしたの？」

ベリエスと呼ばれた青年は背筋を伸ばし敬礼をする。

だが、ノエルは、こんな場所で敬礼なんかしなくてもいい、と彼を諭した。

予想外の言葉だったのかベリエスは少し困惑した表情を浮かべながらも、敬礼した手を下ろした。

「別に此処は承認式みたいな正式な場じゃないんだから、むやみやたらに敬礼しなくてもいいのよ。

寧ろ、そんなことばかり気がいつて街の人に危害が及ぶほうが私にとってはおぞましい位だからね……それより何かあったの？」

「は、はい、実はその……隊長が昨日、空けていた時ですね。不思議な人が尋ねてこられたのですが。

その方はどうにも占い師らしくて」

「占い師？ごめん、私、オカルト的な興味はないんだけど……。まあ、いいわ。それでその占い師の方がどうしたの？」

「その方によりますと、現在、こちらの身に危険が及んでいるとか……。しかも彼女は、占いを始めてから数十年らしいのですがこんなに狂気を持った脈流は初めてなんだと……。こちらとしては意味不明な発言ばかりで隊員皆は困惑するばかりだったのですが、本人曰く、余りにも危険すぎるので、わざわざこちらに忠告にいらしたと……」

「へえ……こっちに身に危険が？」

「なんだかとても焦った様子で……。その時、直接話したかったようなのですが、隊長は居なかつたもので、『分かりました、伝えておきます』と言って返したんですけど……。先輩隊員の皆さんはどうせオカルト商法か何かの勧誘でこちらの不安を煽るようなことを言っているだけだ、気にするな、って言ってたんですけど、どうにも自分にはあの占い師の方の表情が本当としか思えなくて……」

ベリエスはどうしたらいいのか分からないのか不安そうに彼女の顔を見つめた。

彼女はそんな彼を安心させる為に、「大丈夫よ」と手に肩を置く。

「皆の言うとおり勧誘か何かだったんじゃないの？というか、皆ものん気すぎるんじゃないの？警備隊の本職分かってるのかしら？全く……ただでさえ書類整理に忙しいのに、部下の教育までに手間が回らないわよ……」。

ベリエス、悪いんだけど、皆に言っておいて欲しいの。不審者を見かけたらちゃんと仕事しろ！ってね。」

「わ、分かりました……」

彼はおどおどした表情を浮かべ、部屋を後にする。

おそらく最後の一言を言う時、彼女の表情が少し不機嫌だったからだろう。

ノエルはため息をつくと再びデスクに向かい書類整理を始める。

「こっちに身に危険が及んでる……か」

元々、非科学的なオカルト話には興味はなく、今の話も丸々と信じるともならない。

だが、何となく警備隊の隊長として胸騒ぎがするのは何故だろうか。

「あー、もうこんな事考えてたら残業伸びちゃうし！」

彼女はそんな独り言を呟きながらもデスク作業へと取り組んでいた。

第二十四話

平和が日々が続いたのもほんの数日。
書類整理が終わった翌日から、警備隊の仕事は事件等で多忙を極め、自身が受けた忠告もすっかり忘れていた。
そして、ある日の銀行強盗事件での現場検証に立ち会っていた彼女の元に部下からこんな報告を受けた。

「隊長、少しお話があるのですが……」

彼女の部下の一人であるストレートに伸ばした金髪の青年・ベリエスは何やら複雑な表情でノエルの元へと近づいてくる。
その表情から重要な用件を感じ取ったのか、彼女は作業を他の部下に任せ、彼の方へと歩み寄った。

「どうかしたの？」

「いえ……実は、フィオナ市内にあるサンベルノ郊外にて、不審者が見つかったという連絡が入りまして。こちらの独断では決めきれないと判断したので、隊長に指示を仰ぎたいのですが……」

不審者、という単語を聞いた瞬間、彼女の表情は鋭い表情へと変わった。
直ぐに近場にいた数人を引き寄せて指示を飛ばしていく。

「また何かあったら無線で連絡するのよ」

ノエルがそう言うと、部下一同は、了解しました、と軽く頭を下げて、サンベルノ郊外へと向かうために車に乗り込んで発進させた。

彼女はその後ろ姿を見届けた後、先ほど作業していた場所へと戻っていった。

あれから既に一時間。

彼女の現場検証の作業が終わり、サンベルノ郊外で作業している部下に連絡を取ろうとするが、無線での応答が無いことにノエルは苛立ちと不安を隠せなかった。

彼女は部下の教育に厳しい事であるが、同時に部下からの信頼も絶大であり、連絡が途絶えるということはありえない筈だった。

「変ね……何かあったのかしら」

「サンベルノ郊外は此処から遠くは無いはずですし、無線圏外の場所でもありませんしね……。少し様子を見に行ってみますか？」

茶色の髪を切り上げ、薄いエメラルド色の瞳を持った青年は横に立っている彼女にそう聞いた。

ノエルも彼の意見に賛成らしく、そうね、と一言呟いた後、無線機をポケットにしまい込み、直ぐにサンベルノ郊外へと向かえる様に車の手配をし始める。

移動する車の中で彼女は窓の外を見上げながら、先日、ベリエスが言った発言が頭の中へと蘇ってくる。

現在、こちらの身に危険が及んでいるとか

いくらなんでも偶然にしては出来すぎている。

こんなに簡単に結びつけるのもどうかしているだろう。

だが、自身の中で蠢いている第六感が警鐘を鳴らしているのは何故

だろうか。
そんな事を考えているうちにサンベルノ郊外へと車は進めていく。
やがて、狭い裏路地に車を進めていった時、道の脇に何かが倒れて
いるの見つけた彼女は直ぐに車を止めるよう車内で叫んだ。

「止めて！」

彼女のいきなりの指示に驚いたのか、部下はブレーキを踏み急停車
する。

慣性の法則から体が前方へと少し倒れるが、彼女は体勢を取り戻し、
ドアを開けて下車する。

そして、倒れている物らしき所へ近づき足を止めると、予想外の光
景が目に入った。

止まった彼女の後ろにいる部下達も悲鳴を上げて、驚きの表情をあ
げている。

「……なんてことだ」

そこには彼女が所属している警備隊の服を着た男が血まみれで倒れ
ていた。

服はずたずたに切り裂かれて、見るも無残な姿へと変貌している。

彼女は念のために、近づいて脈を取るが、既に男は死んでいるよう
だった。

信賴していた部下の残酷な最後の姿に彼女は怒りを露にする。

「誰がこんな事を……」

ノエルは視線を先に見渡した。

道には血痕が転々と続いており、何かの襲撃があった事は明白であ
った。

彼女は、何も言わずに急いで血痕がある先へと足を進めていく。足を進めたその先には薄暗い広場があり、何処となく寂れた風景を醸し出していた。

だが、いつもの広場とは不釣合いの光景が彼女らの目に映った。先ほど倒れていた警備隊の部下と同じ服を着た男らが、血まみれになって数人倒れており、その先で彼女らと同じ警備隊の服を着た金髪青年が優雅に仁王立ちをしていた。

「遅かったじゃないですか。隊長という位があるんならもっと早く異変に気づくべきでしたよね」

不敵に　いや、不気味に笑いながらこちらを向いている青年の姿に彼女は驚きを隠せなかった。

彼女の後ろにいた部下達も同様の反応を示し、言葉を失っている。

「ベリエス、あんた」

「ベリエス？ああ、この人の事か。いやあ、彼がまさか貴女に忠告してくるとは。」

そもそも、あの占い師が貴方の元を尋ねてくるなんて想定外だったし。それと、彼にはこれ以上面倒なこと起こされたら困るから……そこに吊り上げておいたぜ」

男が指すその先には、彼と同じ格好をしている青年が壁に貼り付けられた状態でいた。

恐らく、此処での男と入れ替わりの時にやられたのだろう。

その姿を見るにもう既に息はなさそうだった。

「じゃあ、サンベルノ郊外の通報は嘘だったの……？あんた……何者なの？私の部下をこんな事にしといてただで済むと思ってる？」

ノエルは齒を強くかみ締め、腰に掛けてあつた拳銃を取り出し、中央へ立っている彼の方へと銃口を向けた。後ろにいた部下達もそれに倣い、彼に銃を向ける。

だが、中央にいる彼はその姿に全く臆することなく、彼女らを睨み付けていた。

「もうその時には既に入れ替わつてたからな。気づかない貴女に対して笑いを堪えるほうが辛かったですよ……。それに、お嬢さん、何か勘違いしてますが、世の中、痛み無くして得るものはない。まあ、これだけ暇な警備隊だと、それに毒されて平和ボケしちゃうんでしょ。最も、それが一番に顕著に現れてるのは貴女だったりするんだけど」

「口が過ぎるのよ！黙りなさい！」

ノエルと部下は彼に向かって数発銃弾を打ち込む。

だが、男は何事にも臆することなく銃弾を避けた。

そして、彼の手に一つのナイフが握られる。

彼らが武器を持ち替えるほんの一瞬の隙を突いて、男はナイフを次々取り上げて投げていく。

ナイフは重力に逆らい、真っ直ぐに飛んでいき、部下の体に当たったのか後ろで小さな悲鳴が上がり始める。

彼女は持ち前の体術を利用し、攻撃を避けるが、流石に投げってくる数が多すぎたのかすべては避け切れなかった。

足や腕には擦り傷がいくつつついていく。

それと同時に男の攻撃スタイルを見た彼女は何かに気が付いたようだ。

「貴方……セレス・クレメンテね？」

男 セレス・クレメンテは大当たりと言わんばかりに軽い拍手をし、自身がつけていた変装用のマスクを剥ぎ取った。灰色の髪を切り上げ、趣味がいいとは言えないピアスを右耳につけた彼は、何処かに楽しそうに彼女を見据える。その姿をみた彼女は気に入らない、とばかりに歯を食いしばりさらに睨み付けた。

「ご名答。さすが、ソルドに幼馴染がいるから情報が早かったか。まあ……貴女の実力というものやらを見せてもらいましょうかね」そう言ったと同時に、セレスはこちらに向かって駆け出す。彼女はそんな彼の姿に動じることなく、腰に掛けてあった長刀を手に取り詰め寄っていった。

だが、所詮女の力。詰め寄るノエルに彼の攻撃はあっさりとはじき返され、彼女は体制を崩した。その一瞬の隙に、セレスは彼女に詰め寄り首元に数本のナイフを差し向けた。

ナイフは宙に浮き、全ての急所に差し向けられている為身動きが取れない。そして、後ろで彼女に応戦していた部下は、既に全て負傷し、倒れこんでしまっている為、助けを求めることも出来ない。苦虫を噛み潰した表情でノエルは彼を強く睨み付けた。そんなノエルの姿にも臆することなく、セレスは何処か楽しそうな表情で彼女を見返す。

「貴女には彼の餌となる役目を果たしてもらいましょうかね」
そういったと同時に彼女の首元に男の手刀が入った。

首元に衝撃が走ると同時にノエルは気を失い、倒れこむ。

「やれやれ……お嬢様は中々気の強いお方みたいだ。エスコートする身の方も考えて欲しいね」

冗談交じりでありながらも、何処か嬉しそうにセレスはノエルを片手で抱きかかえてそう呟くと、あの小屋の外でやったように、地面に五芒星を描き、手をつけた途端、大きな光に包まれ、彼らの姿は一瞬にして消えてしまった。

残された部下達はその姿をただ呆然と見つめるしかなかった。

第二十五話

セレスは彼女を抱えたまま、再び目を開くと、先ほどの景色とは一変し、薄暗い研究室の前へと立ち尽くしていた。

目の前にある扉は分厚く、嚴重にロックされているが、彼は手馴れた様子で独自の電子キーを差し込み、暗証番号を入力していく。

そして、彼自身が発明した精神登録技術を利用し、扉を開けると、そこには多くの機材が立ち並んでおり、白衣を身に纏い、何処か神経質な感じを思い浮かばせる一人の男性がモニター上で作業をしていた。男の黒い髪の毛の中には白髪が入り混じっており、セレスよりも少し年上に見える。

彼は彼女を抱えたまま、その男性の元へと近づいて声を掛けた。

「よう。連れて来たぜ。餌となるものを」

声を掛けられた男はモニターでの作業を止め、セレスの方を振り向いた。

そして、気を失っている彼女の体を彼から受け取ると、近くにあったベットにへと寝かせて逃走できないように特殊な手錠を手足につけていく。

男はその作業の手を止めずに帰って来たセレスにへと話を始めた。

「ずいぶんと早かったですね。セレス。もっと時間が掛かると思っていましたよ」

「ふん……バカにするな、エルザ。このぐらい俺にだって出来るさ。それより、あいつの方はどうなったのか？」

軽口を叩かれたのが気に入らなかったのかセレスはどこか機嫌の悪

い様子で、神経質な感じを思わせる男　エルザ・グレーゴルにそう言い放った。

当のエルザ自身は相手にしていないのか全く気にせず聞き流し、奥の方にある扉を指差して彼に話を続ける。

「ああ、アマリエの事ですか？彼女なら隣の部屋で作業をしていますよ。あの方に何かの調査を頼まれたみたいで」

「ふん……そうか……。それより、こんな赤髪のカキをとっ捕まえてどうするんだ？あのソルド二人を引き寄せるだけだったら、こんなたいそれた事をしなくても、あの二人に直接襲撃すればいいんじゃないか？」

「それは……時が来てからのお楽しみですよ」

気に食わない、というよりは不可解だ、という気持ちの方が強いのだろうか。

セレスは少し顔をしかめてエルザに質問するが、彼から返ってきた言葉からは曖昧な事しか発せられない。

これ以上聞いても無駄だと思ったのか、彼はエルザに背を向けると奥で作業をしているというもう一人の仲間の方の部屋へと足を運んでいった。

軽くノックをして扉を開けると、金髪碧眼の女性　アマリエ・エルネストがパソコンでの入力と検索作業に追われていた。

「ああ、セレス。あの女は連れてきたの？」

「指示されたとおりに連れて来た。それよりそっちの状況はどうだ？」

「まあ、そんなに慌てたら得れるものも得れなくなるわよ？ほら、

「二兎追うものは一兎をも得ずって言うじゃない？」

いつもアマリエはこのような軽い口調で話すためどうにもセレスは気に食わないが、ある目的を達する為には彼女の行動にもある程度目を瞑らなくてはならない。

彼女の軽口を聞き流すと、パソコン上に映し出されている画面へと目に移った。

どうやら画面に映っているのは、工業国として名高いこのアルマヴイオラの全国版であり、所々に赤い丸のポイントが映し出されていた。

「これは一体なんだ？」

「この国の主要とされている遺跡のポイントよ。これが無いと術式を組み合わせれないのよ」

「術式？なんだそりゃ？」

「あら、サークナイト伝記の事知らない？この国では有名な歴史で中等・高等教育の教科書にでも載ってるぐらいなんだけど？」

「俺は歴史は嫌いだったから知らない」

彼は悪びれる様子もなくあっけらかんと彼女にそう言い放つ。

その様子を見た、彼女は、しょうがないわね……と一息つくくと、サークナイト伝記の事についてぼつぼつと話し始めた。

はるか昔、魔物が信じられていた旧制時代。

彼らの生活は工業が発達した現代とは全く異なり、脈術と呼ばれる学問が信仰されていた。

よくファンタジー物語で出てくる魔術の系統の話と非常に似たような物で、地の脈絡を理解し、術式を組み込むと、わずかな火を発したりする事が出来たらしい。

だが、それ以上の事は出来なかつたらしく、ランプや電気コンロが発明されていったと同時に技術も寂れていってしまい、現在ではこの国のおとぎ話として伝えられているだけである。

「しかし、この脈術という学問には秘密があつてね……。ちよつと左の画面を見て頂戴」

アマリエはキーボードを操作し、画面の左側に何かのデータを表示させた。

どうやら古い伝記物らしく、彼女はマウスを操作し、拡大させてより見やすくさせて、再び話を続ける。

「これは脈術に関する書類よ。今は国家重要機密として保管されている貴重な書類なんだけれども……。この中にはとても面白いことが書いてあつてね。ある特別な脈術の術式を書くと、現在ある遺跡の中から特殊なエネルギーが発せられ、力を解放されると同時に思い通りの世界の創造が出来るといわれているみたいなの」

思い通りの世界の創造。

つまりそれは一回世界が破滅を迎えることを示している。

「じゃあ、あれか？一回世界を破滅させて、自分達の思い通りの世界が再構築できるって訳か？お前……正気か？こんなおとぎ話に騙されてお前ら二人はせつせと作業を進めているのか？俺には到底理解できないね」

「さすが、元ミーティア研究員って所かしらね。ちゃんとしたデー

タがないと信用できない。そんなに事実を欲しがっていたら、女に嫌われるわよ？それに……ミーティアから追放された貴方を拾ってあげたのは何処の組織かしらね？」

彼女の冷たい目が彼の瞳を捉える。

セレスはそれ以上言い返せなかつたらしく、面白くなさそうに舌打ちして地面に唾を吐き捨てると、乱暴にドアを開けて彼女の部屋を後にした。

そして、作業をしているエルザを軽く見やると、再び研究室の大扉を開けて、外へと出て行った。

「本当、アマリエは人を煽るのが上手ですね」

褒めているのか貶しているのか良く分からない口調で、作業を続けているエルザは彼女のほうへと振り向かずになんも言わずに放った。

アマリエは何処か面倒くさそうに、作業している彼をちらりと見ると、近くにあった椅子に腰掛けて足を組み、作業している彼のモニターを見据えて言葉を紡ぎ始めた。

「……あいつは自分勝手すぎるわ。それが彼の最大の強みであり、弱点でもあるけれどね。まあ、彼は次の案件では最大に活躍してもらわないと困るし……それ以降は用済みね」

「貴女は恐ろしい人だ」

彼女の言葉を聴いて、エルザは苦笑いを含めるしかない。

そんな彼の様子に彼女は大して気に留めていないのか、そう、と言言ったきり黙ってしまった。

そして、何かの考え込んだ後、椅子から立ち上がり、隅においてあった彼女の大剣を手に取り準備をし始める。

「私は今から、彼らをおびき寄せ、向こうへと行って来るわ。フィオナの警備隊長が居なくなっただとなればさぞかし街中は大騒ぎでしょうね。エルザは引き続き、術式の構成と解明に全力を尽くして頂戴」

彼女は愛剣を背負い、彼に対して不気味に笑みを浮かべて研究所の扉を開けた。

既に日が暮れ、辺りは暗闇に包まれていたが、彼女はライトも点けずに、深い闇の中へと足を進めて消えていった。

第二十六話

アドルフとミランは本部への打ち合わせが終わった後、昼食を取る為に、店が多くひしめいているメインストリートへと向かっていた。ある一軒の店へと足を踏み入れようとした時、アドルフの持っている携帯にて何か連絡が入った。

何事かと思い、二人は足を止めて携帯の画面を見るが、携帯に表示されていた画面には見慣れない番号が表示されていた。

「ん？知らない番号からだな……」

「この市外局番は……フィオナからかね？とりあえず、出たほうがいい」

隣に居たミランは何かに気がついたように、彼の携帯の画面を見るとすぐさま電話に出るよう指示を出した。

アドルフはそれに従い、直ぐに電話を取る。

電話の主は若い男性で、後ろのほうから混乱と焦りに満ちた怒号が飛び交っており、その様子から何らかの事態が起きたことは直ぐに予想できた。

「アドルフ・クライトさんでしょうか？突然お電話をお掛けして申し訳ありません……。当方、フィオナ第一警備隊士官のイーベル・フォルクマールと申します。隊長のデスクにある連絡先から、こちらの番号が書いてあったもので……」

そういえば、ノエルが向こうへ帰るときに、何かあったらまた連絡して欲しい、と言う事で彼女に連絡先を渡していた事をアドルフは思い出した。

構わない。どうかしたのか？とアドルフは彼に対して言葉を続けさせる。

しかし、彼から聞いた事実は衝撃的なものだった。

「それが……隊長が誘拐されてしまった」

「何だつて!？」

予想もしない答えにアドルフは思わず、大きな声を出してしまった。それと同時に、辺りにいた周りの人々は何事かと思いいちらに視線を向ける。

彼は電話口を押さえ、申し訳なさそうに、すみません、と軽く頭を下げると、今いるメインストリートから少し離れた人気のない静かな路地へと移った。

「話を途切れさせてすまない。それで、現在の状況は？」

「今のところ、犯人からの手紙や身代金等の要求は一切なく、ベネツト副隊長が隊の混乱を沈静化させるよう努力しておりますが、なかなか収拾がつかない状況になっていまして……」

「なるほど……。隊長が誘拐となると警備隊に激震が走るのも無理はないか……。しかし、なぜ手紙も何も無いのに誘拐されたとわかるのだ？」

よほど言いづらい事なのか、一瞬躊躇したように言葉を途切れさせた後、再び話を再開し始める。

「それは……犯人が隊長の部下に成りすまして、隊長本人をおびき寄せ、何処かに連れ去ったからです。私たちはその人にやられてし

まい、ただその姿を黙ってみるしかなかったんです」

ソルドなどの三組織の一般的なメンバーと同格の力を持っている警備隊。

その警備隊を持ってしても相手を捕まえられなかった人物とは誰なのか、二人は直ぐに予想がついたが、自分の憶測が間違っていないかあえて彼に聞き出してみた。

「そいつは、灰色の髪に興味の悪いピアスをしていなかったか？後は……ナイフを操り攻撃してこなかったか？」

「な……！そうです！今、アドルフさんが言った特徴の人物が隊長を連れ去ったんです！なぜ、知っているのですか？」

「実はつい先日、アレシアでそいつが事件を起こしてな……。名はセレス・クレメンテ。さっき言った特徴の男だ。まさか、隊長から聞いてないのか？」

彼の問いに少し戸惑った様子で、エーベルは申し訳ありません……と謝った。

アドルフは、まあ、過ぎたことは仕方ない、今からの事を考えようと彼に労いの言葉を掛けるが、明らかに先ほどの件で動揺しているようだった。

彼はセレスに関する身体的特徴とある程度の情報を告げて、市内全域に外出禁止命令と一斉手配をするように指示をし電話を切った。電話の内容を隣に居たミランに伝えると、彼は厳しい表情を浮かべてもう一度メインストリートの方へと歩き出す。

「厄介なことになったな。とりあえず、今こっちで体が空いているのはアレンだけだし、今からにでもフィオナに向かわせて……」

アドルフの提案を最後まで聞かずにミランはすぐさま待ったを掛けた。

「駄目だ。アレン君は連れて行ってはならない。それに、ソルド本部からフィオナに向かわせた方が近いはずだ。いつも情報統制が上手いお前がこんな事に気が付かないなんて、よほど動揺してるんじゃないのか？」

何かに気がついたように、アドルフは顔をミランの方に向け、目線を下に背けた。

一回深呼吸をして精神を正すと、自分が今、行った言葉に後悔の念が募ったようで、ココア色の髪が目立つ頭を軽くかき回した。

「ああ、くそっ……。まさかアレンの知り合いがこんな事になるなんて予想付かなかったから動揺しているんだな、俺……。父さん、ごめん」

「今度から気をつけてくれればいいさ。しかし、お前が仕事で動揺するなんて珍しいな……。まあ、とにかくアレン君は此処から出してはいけない。恐らく、これは敵の罠だ。彼女を餌にしてアレン君を誘き寄せる為にな」

「しかし、どうする？もしかしたら、さっきの人物がアレンに連絡を入れていたら……」

「それはこちらから再び連絡を入れておこう。もっとも彼がアレン君に連絡した後では無いことを祈るがね。そして、彼の直属の上司としての君に一つ頼みごとがある。アレシアから彼を出さないために、この地で時間がかかる任務を彼に任命して欲しい。そう……例

えば、君の友達であるフェリクス二十四時間勤務の護衛でもいい。とにかく何らかの癖をつけて彼をこの地に居座れるように手配するんだ」

「分かった。フェリクスにも頼んでみる」

彼はそう言うと、再び携帯を取り出し電話をかけ始めた。

無論、電話の相手はフェリクスである。

アドルフは簡単に事情を話すと、彼は二つ返事で仕事を引き受けてくれた。

直ぐに電話を切ると今度は先ほど掛かってきたフィオナの番号にリダイヤルする。

出たのは先ほどの声と同じ主であることからどうやらエーベルに違いなかった。

「再びすまない。エーベル、アレン・ハロルドという人物に電話を掛けたか？」

「え？アレン・ハロルドさんですか？いえ……隊長のデスク周りにそのような連絡先は見受けられませんでした……どうかされたのですか？」

「いや、掛けてないのならいい。それとその人物には電話を掛けないでほしい。これはこちらの組織の最高責任者からの命令だ。よろしく頼む」

最高責任者からの命令、という言葉聞いたからなのか、彼は言葉を飲み込み、威勢のいい返事を返して電話が終了した。

まだ連絡していないという安堵感と、いつバレルかわからない不安感が少し襲うがそれを気にしていたら組織の仕事は務まらない。

「それじゃあ、再び本部に出向こう。ミーティアにも事情を説明しておいたほうがいい。それと緘口令も敷いておかないとな」

アレシアのメインストリートにある大きなカフェ。

優雅にお茶を楽しんでいる紳士や、お昼時のランチを楽しみながら談笑している主婦の姿が目立つこのカフェで一つの視線が彼らを見つめていた。

一般的な女性としては身長は高く、百七十センチを超えている長身のプロモーションスタイルは抜群で、緩やかにパーマを掛けられた栗色の髪が彼女の綺麗な黒い瞳を輝かせ、元々の童顔を一層のこと引き立てる。

しかし、彼女の容姿とは不釣り合いに身につけられた小さな電子ブレスレットは、何処か違和感を感じさせていたが、他の客は何も気がついた様子もなく此処での一時を楽しんでいる。

彼女は手元にあったコーヒーの残りを全て飲み干し、レジにて会計を済ませると、人気のないトイレへと足を運ばせる。

トイレの個室に入った瞬間。

彼女が目を瞑ると、緩やかなパーマが掛かった栗色の髪の毛は瞬時に、ストレートの金髪へと変わり、童顔を引き立たせていた黒い瞳は碧眼の瞳へと変化する。

そう、先ほどの女性はアマリエ・エルネストその者だったのである。アマリエは手鏡を取り出し、変わった事を確認すると、彼女は一息ついて、便座の蓋の上に座った。

「本当、このブレスレット便利よねえ。どういう仕組みでそうなるのか分からないけど……。エルザ曰く、まだ試作品段階だとか言っ

てたけど、これだけでも十分効果を発揮できるじゃない。まあ、唯一の欠点は体のパーツを変えられないって事かしらね……。しかし、目と髪の色を変えただけで此処まで印象が変わるもんなのね。警備のザルさにも驚いたわ」

何処か楽しむ素振りを見せながら、彼女は手鏡を使い、軽く髪の毛を整えると再び言葉を紡ぎ始める。

「あのおっさん、只者じゃないわね。狙いがアレンなのが気づいてたみたいだし。全くセレスももうちょっと気を利かせたらよかったのに。あの灰色の髪に趣味の悪いピアスじゃ正体バレてもしょうがないわ。猛突突進型の奴はそこまで気が回らないのかしらね」

一息ついて立ち上がり、再び目を瞑ると、彼女の金髪はストレートの黒髪へと染まり、綺麗な碧眼の瞳は髪と同じ黒色に変化した。カバンから、黒いヘアゴムを取り出して、髪を一つに束ねる。

扉を開けて、手洗い場の前に立って鏡を見据えると、童顔が引き立てられていた少しきついメイクを落とし、今の状態に似合った薄いメイクをして身なりを軽く整えた。

綺麗に整えられた黒髪は彼女の動作と同じ方向へ揺れ、先ほどとは全く別人の姿になった。

「一度、綺麗な黒髪にしてみたかったのよね……。さて、このままじゃ任務遂行に支障が出ちゃうし……。彼を誘き寄せるためにもう一ステップ踏まないかね」

第二十七話

一方、頼まれていた仕事が早めに終わったアレンは、ウィルの容態を見に行くため、彼の入院先へと向かっていた。

見舞いの品なのか、彼の手には林檎や蜜柑などの果物が入った袋が下げられている。

その袋を持ったままメインストリートを抜けて、横断歩道を渡ると、白く大きな建物が彼の目に映った。

「アレシア総合病院」と書いてある大きく掲げられた看板をちらりと見やると、外来用のドアを開けてエレベーターに乗り込み、彼の部屋がある六階のボタンを押す。

電光板の数は増え、アナウンスと共に目的の階へつくと、エレベーターを降りて彼の部屋へと向かう。

二回ノックをしてからドアを開けると、丁度ウィルは看護師に付き添われて何らかの検査をしていたようだった。

「あつ、すみません。検査中でしたか。」

「いえ、丁度今終わったところなので。では、これにて失礼します。また何かあればナースコールしてくださいね」

申し訳なさそうに謝るアレンの姿を見て、女性看護師はにこやかにそう返すと、検査用の道具を持って一礼し、部屋を後にした。

ウィルはその姿を見届けると、自らのベットの横に置いてある椅子をアレンに勧める。彼は荷物をベットの横に置いてある小さな机の上に置くと、その椅子に座った。

「調子はどうだ？」

「だいぶ良くなってますよ。来週辺りには退院の可能性もあるらしいです」

「そうか。それなら良かった」

アレンは安心したようにウィルに笑いかけると、ウィルも彼に伝えられるように笑みを返した。

だいぶ回復している様子に彼はホッと胸を撫で下ろす。

「それより、捜査状況の方はどうなつたんですか？」

未だにメディアのニュースで取り上げられているからなのか、ウィルは心配そうに彼にそう尋ねる。

だが、聞かれた彼は首を横に振り、あれ以降、何も発展したことはない、と一言述べるしか無い。

「そうですか……。そろそろ敵側も進展があつてもいい頃なんですけどね」

「悪いな。お前の為にも、早くアイツらを見つけないといけないと思っっているんだが……」

彼の思いつめた表情を見て、ウィルはそんなに思いつめないでください、と彼を宥めた。

でも……とアレンは呟くが、その言葉をウィルは遮る。

「敵側が何もしてないということは、まだその準備ができてないって事です。焦らずじっくり行きましょう」

「全く……お前は本当に優しいな」

慰めの言葉を掛けてくれたウィルにアレンはそう言って、机に置いてあった袋に手を掛けると中から蜜柑を取り出した。食べるか？と聞くアレンにウィルは頷くと一つ渡す。そして、アレンも袋から一つ取ってから剥き始める。

剥いた蜜柑を口に運ぼうとした時、アレンのポケットの中に入っている携帯から着信が入った。

机の上に置いてあったティッシュを一枚取り、食べかけの蜜柑をそこへ置くと、ウィルに一言断り、部屋の外に出て急いで談話室へ向かう。

そして、着信表示を確認すると彼は直ぐに電話に出た。

「もしもし」

「おお、アレンか。今大丈夫か？」

電話の主は上司のアドルフのようだ。その口調はいつもと変わらない。

ただ、彼は今日、本部に向かう以外何も用事は無かったはずだ。何かあったのだろうか、とアレンは考えを巡らせると返事を直ぐに返した。

「ええ。大丈夫ですよ。どうかしたんですか？」

「実は、アレンに身辺警護を頼みたいと思ってな。私の親友のフェリクス・ウィル Heim だ」

突然の知り合いの身辺警護の仕事に彼は一瞬戸惑った表情を浮かべるが、電話口のアドルフは構わず話を続ける。

「最近物騒なのは知っているだろう？フェリクスはミーティアの十二幹部の中でも最高幹部に値する人物なんだ。当然、そのぐらいの地位の人物ならば、防犯を強化していかなければならなくてな。警備隊の連中でもいいのだが、あの二人の襲撃の可能性となると警備に不安が残る。そこで白羽の矢が立ったのが、アレンと言うわけだ。お前なら、あの連中に太刀打ち出来るとミーティア幹部が目をつけたい。良かったな」

トントン拍子に話が進んで行くのにアレンは落ち着きを隠せず、ちよつと待つてください、とアドルフに一言言つと、今、怪訝に思っていることを全て話し始めた。

「ちよつと突然過ぎませんか？それに、僕は街の見回りのシフトもありますし……」

「その件に関しては私がシフト変更させてもらった。心配することは何も無い」

余りにもあつげらんというアドルフにアレンはそれ以上何も言えずにYESの返事を返すしかない。

「はあ……そうですか。警備はいつ頃からです？」

「今日の夕方頃から警護をして欲しいという要望だ。夕方六時にフェリクスがいるミーティア幹部室に行つてくれ」

分かりました、と何処か不服の表情を浮かべながら電話を切り、談話室に設置してある待合用のソファに腰を掛けると今通話した携帯電話の画面を虚ろに見つめる。

そして、彼は一回ため息をつく立ち上がるとウィルのいる病室へ

と戻っていった。

「どうかしたんですか？」

出て行く前とは違う彼の表情を見て何か感じたのか、ウィルは心配そうに声を掛ける。

アレンは、要点を掻い摘んで、先ほどのアドルフの電話の内容を話し始めた。

彼から全ての話を聴き終えたウィルも怪訝そうに顔をしかませている。

「確かに話の筋は通ってますが……。何故今更？警護するのならば、私たちの襲撃事件があった次の日からしたほうが良かったのに……」

既にあの時の襲撃事件から一週間が経過している。

このタイミングでミーティアの最高幹部の警護をするという指示内容を彼らが不思議に思うのも無理は無いだろう。

「まあ、仕事だと言うのなら行くしか無いな。そろそろ夕方の五時前だし……。このまま外に出て本部に向かうよ」

そう言ってアレンは食べかけの蜜柑を全て食べてから椅子から立ち上がる。

持ってきた果物類を冷蔵庫の中にしまい、じゃあ、また来るからなと一言、アレンはウィルに微笑み掛けると彼の病室を後にしたのだ。

第二十八話

病院を出たアレンは、依頼された仕事に向かうため、ミーティア本部の方へと歩き出す。

此処から本部まではそう遠くはなく、歩いて十分足らずで目的の場所へとついた。

玄関前にいる警備員に、ソルドの身分証明書を見せて中に入る。

既に何度も出入りしているからなのか、受付にいる事務処理担当の職員達はアレンの姿を見ても何も言うことはない。

受付を通り過ぎ、幹部たちが集まる会議室へ足を運んで扉をノックしようとした時、突如、背後から声を掛けられた。

「おお、アレン君」

書類を持ち、いつも通りにこやかな表情を浮かべて立っていたのは、依頼主であるフェリクスだった。

彼はドアを開けて、手に持っていた書類を自らのデスクに置くと、アレンを部屋に通す。

そして、彼に席を薦め、座ったのを確認すると、自らも腰を掛け、今回の仕事内容について話を始めた。

「突然、呼んで申し訳ないね」

「いえ、大丈夫です。しかし、いきなりの呼び出しで……一体何かあったんですか？」

「あの事件以降、責任者が幹部の警備が義務付けられていてね。ミーティアの職員達が警備に当たっているのだが、どうしても人員が足らなくてね。」

応援としてアレン君に来てもらったというわけだ」

なるほど、とアレンは一回頷くのを確認した後、フェリクスは持っていた資料を彼に一枚渡した。

一番上のタイトルには今回の仕事内容について、と書かれてあり、アレンは項目にザッと目を通す。

実労時間は約九時間ほどで、基本的にはフェリクスの警護というよりは補佐役として仕事を手伝うということらしい。

「警備と聞いていたから、もっと過酷な仕事かと思っていましたよ」アレンは安堵した表情で目の前にいるフェリクスにそう話しかける。警備の仕事は対象者のためにかなりの神経を使う上に、時間も長く拘束される為、通常の仕事以上に大変だということは、彼も以前の仕事の経験上よく知っていたからだ。フェリクスは、確かにそうだな、と頷くと再び話を紡ぎ始める。

「私はあまり出張することは少ないから、アレン君が思っているよりは楽な仕事な方かもしれないね。ただ、今回は補佐と言う事で、書類整理を手伝ってもらわないといけないんだけど……」

彼はそう言っつて、机の奥のほうから地図や依頼書などの重要書類を引っ張り出していく。

しかし、書類の量は思っていたよりも多く、彼の机の上全体を埋め尽くしてしまった。

アレンはその様子に少し顔をしかめるが、当のフェリクスはその量に慣れているのか全く動じない。

書類の束を彼の元に置くと、フェリクスはいつも通りの表情で話しかける。

「じゃあ、この第二重要書類を全て整理して、私の名前でサインを
していつてくれないか？」

「あー、疲れた」

時刻は午後九時過ぎ。

この時刻になると夜勤担当の職員しか残っておらず、とても静かだ。
アレンは疲労の色を見せながら背伸びをした後、椅子から立ち上がる。

窓の外からは綺麗な夜景が映っており、アレシアの夜の街並みがよく見えた。

フェリクスは、彼にお疲れ様、と一言言うと、机の上に温かいコーヒーの入ったカップを差し出した。

彼は置かれたコーヒーカップを手に取り、ミルクを入れて啜ると、大きく息を吐いた。

「まさか、書類が此処まであるとは思いませんでしたよ」

彼がそう思うのも無理は無い。

あの後、彼は百枚足らずの書類に目を通し、サインと印鑑を押していったからだ。

疲労で痛むのか、カップを置き、右腕を回す。

フェリクスは自らの書類を机の中に片付けながらも、彼の方を向いて話を始めた。

「あれはいつもより書類が少ない方だったんだけどね。いつもは二

倍ぐらいあるから」

二倍！？とアレンは驚きの表情を浮かべ彼の方へ振り向く。彼のリアクションが少し面白かったのか、フェリクスは片付けていた手を止めて思わず吹き出してしまった。

その様子にあレンは頬を膨らませ、そんなに笑わないでくださいよ……と一言呟くが、フェリクスの笑いは止まらない。

やがて、フェリクスは一呼吸置いて笑いをやめると一言謝った。

「ごめんごめん、ちょっとアレン君の表情が本当に素で面白かったから……」

「全くフェリクスさんもアドルフさんと同じじゃないですか……」

発言が気になったのかフェリクスはどういう事だね？と聞き返すと、アレンはカップを取り上げ、再び口に含みながらもその理由を話し始めた。

「アドルフさんも、僕の事をそうやって笑うんですよ。お前は面白いな、とか言ってる」

「はは、アドルフらしいな。あいつは人をいじるのが好きだからな」昔の事を思い出したのか、フェリクスは懐かしそうな表情を浮かべ、窓の外に映し出されている夜の街並みを映し出しているアレシア市内を少し見据えながらも、自らが作ったコーヒーを一気に飲み干した。

既にアレンのカップが空になっているのに気づいたフェリクスは、もう一杯飲むか？と薦めるが、寝れなくなりそうですので、と彼はやりわりと断る。

その返事にフェリクスは、そうか、と答え、ドアを開けて隣の給湯室に使ったコップを持ち運ぼうとした時、すかさずアレンは手伝おうと彼を静止させた。

「僕がやるからいいですよ。フェリクスさんは部屋にいてください」

「いや、最初に持ち運んだのは私だからね。アレン君は帰りの準備をしておいてくれないか」

声を掛けられたフェリクスはいつも通り穏やかな表情を浮かべると隣にある給湯室へとコップを持ち運んだ。

スポンジに洗剤をつけて水洗いをして水を切ると、備え付けのタオルを手にとって丁寧に拭き、棚の中に戻すと、アレンがいる部屋に戻ってきた。

アレンは言われたとおり、入れてあった専用ロッカーから荷物を取り出し、既にコートを着込んでいる。

フェリクスも彼の隣にあるロッカーを開けて荷物と上着を取り出す。

「じゃあ、帰ろうか」

窓の戸締りを確認しドアを開けて外に出ると、フェリクスは専用の鍵でドアをロックすると二人は廊下を歩き、受付の前を通り過ぎた。そして、綺麗な夜空と色とりどりのネオンが浮かぶアレシア市内へと歩き始めた。

第二十九話

「家まで送りますよ？」

本来のアレンの仕事はフェリクスの護衛だ。

アレンは彼の身を案じてそう言うが、対するフェリクスは繁華街の近くで、いや、此処でいい。アレン君も気をつけて帰ってね、と言いうと、色とりどりのネオン街並みへと消えてしまった。

フェリクスさんも意外と飲みに行くんだな、と心のなかでアレンはそんな感想を抱きつつも、夕飯用のご飯を近場のコンビニで買おうと、その袋を下げたまま彼は借りているアレシアの寮へと歩き進めていった。

「ただいま」

誰もいない真つ暗な部屋の中で彼の声は木霊する。

アレンは靴を脱ぎ電気を付けると、荷物は全て机の上へ置いた。着ていた組織服も着替えると一息ついてソファアの上へと腰を下ろす。何気なく、テレビのリモコンにスイッチを入れてチャンネルを回してみるが、あまり面白い番組はない。

適当な番組にチャンネルを合わせると、アレンは買ってきた唐揚げ弁当を取り出して口に運び始めた。

（そういえば、ノエルどうしてるのかな）

此処一週間、彼女から連絡が全くない。

いつもなら週に一回程度は向こうから連絡を取ってくれており、恐らく今回は仕事が忙しいのだろう、と彼は思うが、彼女の性格からして、一週間全くメールも電話などの連絡が無いのは少し不気味に

感じる。

久々にこちらから電話してみようか、とアレンは思い立ち、懐からプライベート用の携帯電話を取り出すと、彼女に電話を掛けた。しかし、彼女の携帯は電源が切られているのか「おかけになった電話は現在電波の届かない場所にあるか電源が切られており」「のアナウンスが繰り返されるだけだ。

(出ないな……。寝てるのか……。?)

時刻はまだ十時過ぎだが、警備隊長という職務の都合上、早朝勤務が多い。

その為に早く寝ているのだろうか、とアレンは思考を巡らせると、持っていた携帯を閉じると再び懐へしまい込む。

付けているテレビをBGMにしながら、残っている弁当を食べ進めていった。

翌日。

昨日は遅めの夕飯と摂った後、風呂に入って即座に寝てしまったらしい。

まだ時刻は朝の六時頃で、九時の勤務からまだ時間がある。

彼は起き上がって直ぐに身支度を整えると、長い黒いコートを羽織り、外へと出かけた。

外を出てアレンが向かった先は、この近くにある露店街だった。

朝が早いにも関わらず、既に人が多くひしめいていた。

ヴィオラの露店街よりもはるかに店は並んでおり、近くのテーブルでは仕事前に一服しようとしているサラリーマンなどがよく目立つ。アレンは軽食専門の露店へ向かい、ハムとチーズの入ったホットサ

ンドと温かいブラックコーヒーをテイクアウト注文すると、食事前のテーブルに座り食べ始めた。

「アレン、珍しいじゃないか」

その声を掛けてきたのは上司であるアドルフだった。

彼の手にはアレンと同じ、ハムとチーズのホットサンドが握られており、一緒に席いいか？とアドルフは聞いて、アレンが頷くのを確認すると向かいの席へ腰を下ろした。

「お前、いつも遅刻するときに言っていた朝に弱いつて話は嘘だったのか？」

「いや、今日はたまたまですよ」

上司の疑いの視線にアレンは、本当ですよ？と言ってホットコーヒーを啜る。

まあ、そんな日もあるか、とアドルフは勝手に自己完結すると、彼に向かって話を紡ぎ始める。

「仕事の方はどうだ？」

「結構、楽しいですよ。それにフェリクスさん優しいですし」

「まあ、確かにフェリクスは良いやつだからな。しっかり護衛の方頼むぞ」

護衛と言うより補佐みたいな感じですけどね、とアレンは言つと最後の切れのホットサンドを飲み込んだ。

そして、コーヒーを飲み干すと片付けるために席を立ち上がる。

「もう行くのか？」

「ええ。アドルフさん忙しそうですから」

アドルフが開いていた黒い手帳に気がついたのだろう。

そのスケジュール帳にはぎっしりと予定が詰め込まれている。

「事件から二週間経って、ようやくアレシアの日常も戻ってきたよ
うだが警戒レベルは下げられないしな。それに俺が忙しくない
組織は回らない。　　まだ時間はあるんだろう？　そうも言わずにも
うちよつと居ろ。俺も朝はゆっくりしたいしな。そのクレープ屋
で好きなもん買ってこい。俺のはチョコバナナクレープでいいから」

突然、銀貨一枚を渡されてアレンは彼に返そうとするが受け取る
としない。

これが上司なりの部下への愛情表現なのだろうか、とアレンは思考
を巡らせながらも、クレープ屋へと足を運んだ。

言われた通りクレープ二つを買い、アドルフの元へと戻る。

しかし、彼らが楽しく話をしながら食べ進めていると時刻は既に八
時を回ってしまっていた。

第三十話

「はあはあ……間に合った」

時刻は朝の九時五分前。

アドルフと二人で話をしていたら遅くなってしまった。

アレンは息を整えながら、ミーティアの玄関へと足を進めていく。彼が扉を開けると既に、フェリクスは書類の山を積み重ねて整理整頓を行っていた。

「おはよう、アレン君」

いつもと同じく温和に包まれた爽やかな笑顔で彼を出迎える。

「あの、遅くなってすみません……」

「大丈夫。まだ九時にはなっていないからね。それより今日は少し頼みがあるのだけれど」

「何ですか？」

「実は会議に出なくてはならなくなっただけ……。お昼ごろまでには帰ってこれると思うけれど……」

ちょっと待ってください、とアレンは彼の話を遮った。

何故、話を止められたのか分からなかったのか、フェリクスは怪訝そうな表情を浮かべるがアレンは構わず話を続ける。

「僕も一緒に行きますよ。じゃないと、フェリクスさんの護衛を務

める意味が無くなってしまいました」

彼が話を止めた意味が理解できたようだ。

フェリクスは、ああ、いや別にいいんだよ、と言って、積み重ねている書類を倒さないように整頓しながらも彼に向かって話します。

「今回はアドルフと一緒に行くことになっているんだ。確かにアレ君の護衛力は買っているけれど、今日は君にそこまでしてもらう必要は無いと思ってね。そこでなんだが……。今日はこの部屋の留守番を頼めるかな？」

「えっ、留守番……ですか？」

「私もこのような職務にいる以上、緊急時の各部署の連絡役と出勤役は必ずいるのでね。アレ君のような多数の実践経験者なら私が居なくても的確に指示ができると思うのだが、頼めるかな？」

温和な表情を浮かべているフェリクスに対して、アレンはまだ納得が行かない表情を浮かべながらも、分かりました、と答えた。

本当に済まないね、早めに帰れるようにこちらで手配するから、とフェリクスは言って、設置してあるロッカーから荷物を取り出し、支度をするそのままアレンに背を向けるとドアを開けて出て行ってしまった。

一人残されたアレンはため息をつく、テーブルを挟んで、応接間のようにになっている上品なソファアへと腰を下ろす。

(僕、待ってるのが一番苦手なんだけどな……)

フェリクスが出て行ってから二時間が経過した。

彼が出かける前に机で整理整頓していた書類を見てみたが、既にサインが入っており、これ以外に部屋で出来る仕事はアレンにはなさそうだった。

（此処はソルド本部じゃないから、指示されている物以外、触っちゃいけないだろうしな……）

彼に頼まれた役目は留守番役。

街で何かあつたら対応をしてくれ、ということと飲み物を取ってくる事とトイレに行く事以外はこの部屋にずっといるが、流石にいくらアレシアの都市的な街並みを眺めていても退屈なばかりだ。

アレンは窓に広がる風景を眺めながら、自ら沸かした紅茶を啜っては何度もため息を付いている。

机の置いてある小型の無線機を取り上げ、耳を傾けてみるが、特に異変もなく、各警備隊のチームの通常の業務連絡しか聞こえてこない。

彼は無線機を元に戻し、何気なく、壁にかけてあるシンプルな時計を見やると時刻は午前十一時を回ろうとしていた。

（仮にお昼を十二時までとしても、後一時間か……。案外、上司の仕事も楽じゃないんだな……）

いつもこのような業務を行なっているアドルフに些か感謝を覚えつつ、ソファーに座っていた体を起こし背伸びをしようとしたその時、彼の内ポケットに入れている携帯電話が震え始めた。

「誰だ……？」

鳴っていたのは仕事用で利用している黒い携帯電話だった。

見覚えのない番号からだったが、相手の市外局番から見ると限りフィオナからの電話のようだ。

職務上、仕事先で名刺を渡したりすることが多い上に、殆どのケースでは数回の連絡で仕事が終了してしまうので、アレンは頻繁に連絡する人以外登録していない。

その為、覚えていない人から掛かってくるといふ事はよくあり、彼は気にせずにもいつも通り電話に出る。

「もしもし？」

「アレン・ハロルドさんでしょうか？」

電話口に出たのは若い男の声だった。

仕事関係の連絡、ましてや知らない人からの電話ならば、向こうが先に名前を名乗ってから聞くのがマナーだ。

不快に思ったアレンは、どちら様ですか？と聞き直すと、男は何かに気がついたように一言謝る。

「申し訳ありません。突然の無礼をお許してください。私はフィオナ警備隊第二副隊長のティル・ジルヴェスターと申します。今回、特殊な用件についてお話がありまして」

「特殊な用件とは？」

「実は……。ノエル隊長が誘拐されてしまって」

「んな……！？」

電話口で声を潜めて言う男の突然の衝撃的な事実の告白によりアレンは動揺するしか無い。

彼が動揺するのも構わずに、電話口の男は言葉を続ける。

「それで、こちらに脅迫状のような物が届きました……。差出人は不明で、内容はノエル・イザベラは預かった。彼女を返して欲しければ、フィオナ郊外の二十四番街の倉庫に来いと……。そして、アレン・ハロルドさんが一人で来る事が条件となっております。以前、隊長が連絡連れてくると彼女の命はないと書かれています。で、以前、隊長が連絡先としてアレンさんの番号が書かれた紙が机の上に置いてあったので、こちらに電話を掛けたのですが」

「分かった。そういう用件ならすぐに向かう。他の人達にもそう伝えておいてくれ」

「了解しました。では、お待ちしております」

そう言って、男は電話を切った。

アレンは焦りと混乱の表情を浮かべて、電話を直ぐに内ポケットへしまつと荷物を纏める。

その時、自らが付いている業務に関しての考えがよぎった。

(そうだ……、留守番……)

現在はフェリクスの留守番役を頼まれている。

勝手に職務を放り出すわけには行かない。だが、彼の仕事の優先順位は必然的に決まっていた。

アレンは直ぐにドアを開けて部屋を飛び出すと、近場にいたミーティア職員に、済まない、出かけてくる、と一時的な留守番役を頼み、フィオナに向かうために駅へと走りだす。

(今は、ノエルの方が心配だ。恐らく、あいつを襲った奴らは)

「了解しました。では、お待ちしております」

メガネを掛けた些か神経質そうな男は電話口で笑みを零して、電話を切った。

此処は、彼らがいつも組織が使っている研究室。

男の目の前には、金髪碧眼の女性が退屈そうに椅子に座っている。そして、彼女の隣には、手足と口を塞がれ、何らかの大きな透明の入れ物に入れられた赤髪の少女がこちらを睨みつけて見据えている姿が目に入り、縛られた足を使って蹴っているが防音になっている為全く聞こえない。

「あなた、声帯模写の趣味でもあったの？」

アマリエがそう言うのには理由があった。

先ほど、どのタイプの人物で彼に電話をかけようか、とメガネを掛けた神経質な男は何度も声を変えて練習していたからだ。

もつとも、彼が決めた声音は、心地が良いぐらいうよく声が透き通る人物の物であったが。

男の変幻自在の声音を見せられて、金髪碧眼の女性はただ驚嘆するしか無かったのだ。

しかし、対する男は、別にこんなものは慣れれば直ぐに出来ますよ、と素っ気なく返して、言葉を続ける。

「面白いぐらい完璧に信じきってましたね。まあ、名前は偽名でしたが……。フィオナの市外局番、ましてや、本物の警備隊に繋が

る番号が表示されていたら誰だつてそう信じるでしょうね。いや、組織の中で唯一の別名を持つているほどの実力の持ち主と聞いていたが、こんなにも呆気ないものだとはい、少々詰まらないですな」

エルザは余りの手応えのなさに不満なのか、持っていた携帯を弄ぶてあそ。アマリエは彼のその姿を黙って見据えていたが、直ぐに言葉を紡ぎ始めた。

「こうして見る限り、機械を弄らせたなら、エルザに勝てるものは居ないと思うわ」

「ふふ。同僚ですら冷たく見下ろし、天下の女王様気取りのアマリエがそう褒めるとは……。いやはや意外ですな」

彼は毒舌を交えているが、まんざらでもないのか、エルザは少し機嫌の良さそうな表情を浮かべてそう言った。

それより、とアマリエは回転式の椅子を少し回し、彼に向かって一つ問いただした。

「先ほどの番号表示の偽造はどうやってやったのかしら？」

「何、簡単なことですよ。少し回線を弄って、偽の番号を上乗せしてしまえば、直ぐに表示が変わられます。着信場所も同じように変えられますから、こちらから発信した事にはなっていません。この国の電話回線の仕組みは単純すぎる。ただ単に暗号化して盗聴対策をすればいいってもんじゃない」

まあ、そんな事はどうでもいいでしょう、とエルザは使ったアトラティックブルーの携帯を懐にしまつと、白い携帯電話を取り出し、何処かへ電話をかけ始めた。

何度かの呼び出し音が鳴った後、一人の男性が電話口に出る。彼は男に対して、現在の状況を話すと、電話口の男はそうか、と言答えた。

「計画は順調です。貴方の野望ももうすぐそこですよ……。ええ、舞台は全て整いました。後は役者を待つのみです。えっ？はい、分かりました」

彼はそう答えると、目の前に居たアマリエに電話を渡した。

「アマリエ、レクシメンス様から大事な用件があるそうです」

訝しげに顔を歪ませる彼女は、電話を受け取ると通話相手の男レクシメンスと通話をし始める。

そして、彼女は最後に了解しました、と一言言つと、電話を切つた。使った電話をエルザに渡すと、彼女は置いてあった大剣を取り出して、背中に背負う。

「悪いわね、エルザ。上司から直属の命令が出ちゃったわ。まあ、私としても同じ考えだったから丁度良かったけどね」

「そうですね……。早めに戻ってきてくださいよ。これから忙しくなるんですから」

分かったわよ、とアマリエは大剣を背負い、エルザに背を向けると、ドアを開けて外へ出ていった。

第三十一話

一方、その頃、ようやく会議が終わり、アレシア市内にあるミーテ
イア本部へ帰ってきたフェリクスは、一緒に居たアドルフと共に玄
関へ入っていく。

早めに帰ると言っておきながら、時刻は既に午後一時前であり、ア
レンくんに申し訳ないことをした……と思いながらも扉を開けた。
しかし、部屋には誰もおらず、彼の姿は見当たらない。

「変だね……。留守番役を頼んだのだけれど……」

「昼時だし、何処かに買い物にでも行ってるんじゃないのか？」

「まあ、確かに時間が時間だしね……。ちょっと他の人に聞いてみ
るよ」

フェリクスは、扉を閉めると、廊下の近くにいたミーティア職員に
声を掛けた。

声をかけられた職員は、書類を持ったまま、どうかされましたか？
と彼に対して問う。

「ちょっと、済まない。アレン・ハロルド君を見なかったかね？」

彼は名前を言うが、聞き覚えのない名前にピンと来ないのか、怪訝
そうな表情を浮かべた。

フェリクスは、ソルドの服を来た黒髪の人の事なんだけど、と付け
加えると、職員は、ああ、あの人ですか、と何か思いだしたかのよ
うに言葉を紡ぎ始める。

「なんか、フィオナの警備隊の人から電話があつて急用が出来たら、僕が居ない少しの間、一時的な留守番をお願いします、と言って出て行きましたよ。」
「確か二時間ぐらい前だったかな」

彼の発言に、アドルフ達は互いに顔を見合わせた。

おかしい。

フィオナの警備隊がアレンに電話を掛けてくる思い当たる用事とすれば、現状の所ひとつしか無い。

そう、ノエルの誘拐事件だ。

しかし、あの事件の事はミーティア内部の中でもフェリクスを含め、上層部の一部しか知らないはずだ。

「その警備隊の人の名前、わかる？」

「確か、副隊長のティル、なんとか……という人から来たと言っていました」

嫌な予感を感じたフェリクスはアドルフにアレンに電話をかけるように指示をした。

彼も同じ考えだったらしく、アドレス帳の中からアレンの番号を探し出し、電話を掛ける。

だが、彼の携帯には電源が入っていないのか、おかけになった電話は現在、電波の届かない場所にあるか電源が切られており、機械的なアナウンスが繰り返されるだけだ。

アドルフは、悔しそうに舌打ちすると、彼に掛けていた電話を切り、着信履歴からフィオナ警備隊の電話番号を探しだし、発信ボタンを押した。

数回のコール音が鳴り響いた後、電話に出たのは、以前、アドルフに状況を説明した男　フィオナ第一警備隊士官のイーベル・フォ

ルクマールであった。

「もしもし？」

「エーベルか？急で悪いが、お前の警備隊の副隊長に、ティルって
いう奴いるか？」

突然の問いに戸惑いを隠せずには居られないようだ。

だが、切羽詰まった口調で何かを感じたのか、いいえ、そのような
名前の人物は居ませんが……？と彼は答えた。

そうか、すまない、とアドルフは言って直ぐに電話を切ると、苦々
しい表情を浮かべた。

「完全に、奴らの罠にはまったな、アレン」

病院にいたウィルは中にある食堂でお昼ご飯を食べた後、エレベ
ーターに乗り込もうとした時、ある人物と出会った。

その人物は彼より二、三歳ぐらい若いであろう灰色の髪でココア色
の瞳が特徴的な青年だった。

ウィルの姿に気づいた青年は、急いでエレベーターに乗り込み、お
久しぶりです、と声を掛ける。

「誰かと思ったら、スコットでしたか」

見覚えのある顔にウィルは思わず笑みを零す。

いつもアレンのデスクの隣に座って作業をしているスコットだった。
彼は久々に会えた、先輩に対し嬉しそうな表情をする一方、直ぐに
申し訳ない表情を浮かべた。

「お見舞いに来るのが遅くなってすみません……。事件の処理や先輩らの報告書が多かったので、来るのが一週間以上遅くなってしまいました……」

「別に構わないよ。むしろ、ヴィオラから離れたこのアレシアまで足を運んでくれてありがとう。何も無いけど、お茶ぐらいなら出せるところから」

エレベーターが目的の階へついた後、ウィルはそう言って後輩のスコットを部屋へと案内すると、簡易ポットを使い、紅茶を差し出しました。

差し出された温かい紅茶を一口啜り、一息ついた。

「最近、寒いので、温かいものは身にしみますね。ありがとうございます」

「簡易的な物で申し訳ないね」

「いえ、僕は紅茶、好きですから……。それより、さっきアドルフさんに会ったのですが、アレンさんに何かあったんですか？」

突然、そのような話を振られるとは思わなかったのでウィルは怪訝そうな表情を浮かべた。

「アレンとは二日前に会ったばかりなんですけど……何かあったんですか？」

「さあ……詳しいことはよく分かりません。アレンから連絡が無かったかどうか聞かれただけなので。でも、フィオナがどうとか聞こ

えてきたな。

そういえば、フィオナって言ったら、アレンさんの幼なじみがいるって言うてましたよねー」

部屋に置いてある時計を見上げ、何かに気がついたように、あつ、そろそろ行かなきゃ、と言ってスコットは紅茶を飲み干し、カップを彼に手渡して立ち上がった。

「もうそろそろ戻らないと。ヴィオラの仕事はまだ残ってるんで」

お大事に、とスコットは彼に手を振って部屋を出ていった。

その姿を見送ったウィルは扉が閉まり、彼の姿が見えなくなると、何かに気がついたように表情を一変させる。

そして、机の上に置いていた携帯を取り、ある場所へと電話を掛けた。

「もしもし、フィオナ警備隊ですか？ウィル・アーヴィンと申します。実はちょっと聞きたいことがあるのですが」

そう言っただけで彼は相手先に説明を求める。

電話口で説明を聞いていたウィルは話を聞き終えると、何かを確信したように、では、失礼します と電話を切った。

そして、壁にかけてあった新しく新調した自らの組織服を取り、立ち上がると同時に、袋に包まれてしまつてある自らの剣を取り出し、見えないように腰に備え付けた。

（本当はこういう真似はしたくないけど……。今回に限っては凄く嫌な予感がする）

ウィルの勘の良さは昔からだった。

大体、彼が嫌な予感を感じさせると、アレンが何かしら危ない目に合っていたりすることがあるのである。

今回はいつもと違い、心の中がざわめく程の不吉な予感が彼の胸の内へよぎる。見過ごすわけには行かない。

彼は見つからないように長い銀色の髪を一つに結ぶと、申し訳なさそうに、病室のドアを開け、こっそりと出ていった。

第三十二話

日が落ち、森から見える街の明かりが夜の夜景へと変わっていった頃。

突如、地面の上に五芒星の形が浮き上がり、一瞬光ると、一人の男がその場に立ち尽くしていた。

外見に似合わぬコートを着込み、灰色の髪を整え右耳に趣味の悪い十字架のピアスをした男　セレス・クレメンテはある任務を遂行するためにフィオナ郊外にある倉庫へとやってきた。

薄暗い中に佇む倉庫は何処か不気味であるが、その姿を見る度に彼の中にある何かが駆り立てられる。

彼は術を発動するために利用した地面に突き刺したナイフを全て抜き取ると、いつもの懐の場所へとしまい込んだ。

（　いよいよ、か　）

アレンをおびき寄せる手段はエルザが上手くやっているだろう。

セレスに与えられた役目は、こちらに来たアレンと戦い、捕まえた後、彼自身の中に秘めてある力を引き出すことであるが、彼は未だにそんな事が可能であるのか信用ならなかった。

（　あの時以来、あいつに教えて貰った脈術は実際に発動したから、非才カルト思考の私でも信用できるようになった。しかし、大地の流れを利用し、自らの体を転移させるぐらいの能力しか持たないこの術に世界の破滅を迎えるほどの力があるとは思えない。『ヴィザード』の連中は一体、何が目的なのだ？）

彼が所属している組織……通称『ヴィザード』はこの国の三大組織

とは違う方向性を持っている特殊な組織だった。
メンバーである彼ですら、彼女ら幹部の本当の真意を知らない。
世界を創造させる為に、と彼らは言っているが、それも本当かどうか怪しいものだった。

セレスがこの組織に所属したのは数年前に起こったある事件がきっかけとなった。

重大な事故を起こした責任として、当時所属していたミーティアから追放された時、とある地方のバーでこの組織の長と名乗る男との出会った。
彼は『レクシメンス・コルネール』と名乗り、日陰者としての生活を送っていたセレスの正体を見破っていた。

そして、彼の一生の生活と高額な給料を保證する見返りとして、自らが立ち上げた組織に所属するように条件を差し出した。
当然、昔のセレスにとっては、魅力的な条件であり、断る要素も一切無かったため、二つ返事で、彼の部下として日々、手駒として動いてきたが。

（果たして、あいつは私の事をどう思ってたスカウトしたのだろうか……。その真意は本人のみぞ知るといふ事なのだろうか）

そう思考に耽っていたセレスの前にある人物がこちらに向かって歩いてきた。

薄暗い部屋の中ではその人物の顔はぼんやりとしかわからない。
しかし、向こうの持っている光源がこちらに近づき、大きく光るとその人物の表情が映し出された。

「よう、久しぶりだな。セレス・クレメンテ」

組織で支給されている携帯用の黒い懐中電灯を手に持ち、セレスに

向けて光を当てていたのはアレン・ハロルドだった。

だが、真紅の瞳に映っている目は冷たく、その表情は誘拐されたノエルに対しての怒りに満ちていた。

姿を見る限りでも、彼が相当、憤りを感じていることは、セレスにとって肌を感じるぐらいよく分かる。

「約束通り、一人で来たか。てつきり、約束を破って数人の仲間を連れてくると思っていただけだ」

「見くびるなよ。僕はそこまで弱いやつじゃない」

「　　畏とわかってこっちに来たのか？」

暗闇の中で不気味に笑うセレスにアレンは吐き捨てるように言い返す。

「正直、この倉庫に来るまで、畏だとは思わなかった。まさか、電話番号の発信地を偽造するなんて予想外だったしな。　ノエルは何処だ？」

「畏を出しぬいたというわけか。面白いやつだ。その表情、アマリエが見たら喜ぶだろうな。あの女は狂気にまみれた物が大好きだから」

言葉を見殺し話を続けるセレスに、アレンは何も言わずに懐中電灯を切ってしまうと自らの愛銃を取り出し、銃口をセレスの方に向けた。

その目は殺気に満ちており、見る者からすれば背筋が凍るほどだ。彼は静かに口を開き、目の前にいる敵に向かって言い放った。

「僕の言葉、聞こえなかった？ノエルは何処に居るかっ聞いてるんだよ！」

アレンはそう大声で叫ぶと、男に向かつて数発打ち込んだ。セレスは走って避け、その姿を何処か不快そうに彼を睨みつけると懐からいつも使っているナイフを数本取り出す。

「やれやれ……。彼女といい、貴様といい、血の気が多すぎるんだ……よ！」

彼はナイフを数本取り出して投げ出す。

アレンはナイフの攻撃を避け、跳ね返ってくるナイフに対し、腰にかけていた近距離用の剣を素早く取り出し、叩き落す。

「前と同じと思うなよ、セレス！」

右手に剣を持って、飛び回るナイフを交わしながら、左手に持った銃で、動きまわるセレスを狙い撃ちする。

その攻撃が出来るのは、組織の中でも剣と銃にどちらとも高度な技術に精通しているアレンだけにしか出来ない技だ。

彼が撃った弾が掠めたのか、セレスの頬に一筋の血が流れる。

「流石、組織の中でも、二つの名を持つているだけの實力はある……。実に面白い」

「お前の御託はいいんだよ。早くノエルの居場所を吐け！」

銃を撃つ手を止めずにアレンは男を睨み続ける。

男はその姿に満足したように、攻撃を避けながらも、ナイフを操っていく。

やがて、アレンの銃の弾は切れるが、直ぐに手馴れた手つきで追加していく。

（ 少し、使いすぎたか ）

念には念を入れて、弾は多く追加して持つてはきていたが、男の避けるスピードが早いため弾が追いつかない。残る弾は少なくなっていく。

数発は男の体に当たっており、時折、辛く動いている姿を見受けられる。

だが、残りの弾は全て無駄となり、持っている弾だけがどんどん消費されていく。

対するセレスの攻撃武器であるナイフは、彼が操作をやめるか、ナイフ自体を壊さない限り、半永久的に飛び続けているため、アレンの武器である銃が使えなくなるのも時間の問題であった。

（ 少し、賭けになるけど……。やってみるか ）

アレンは銃をホルダーにしまい込むと、腰にかかっていた黒と銀の入り混じった長剣を取り出した。

そして、ナイフの攻撃を撃ち落としながらも、セレスの元へと走り詰めていく。

突然の攻撃手段の変更にセレスは一瞬戸惑うが、勝ち誇った表情を浮かべた。

（ ほう、弾が無くなったか……。ならば、チャンスだ……。！ ）

持っているナイフを彼に投げつける。

だが、アレンはその攻撃を避け、一気にセレスの懐へと詰め寄ると、持っていた剣を彼の方へと振りかざす。

(何……！？)

当然、セレスは攻撃を避けるために体を捻るが、その狙いが逸れたタイミングがアレンの狙っていた瞬間だった。

剣はセレスの体に向けて振りかざされたのではなく、彼が手首に付けていたブレスレットの方へ向けられていた。

フェイントを仕掛けられたセレスは、その部分はまるでノーマークだった為、防ぐことが出来ずにそのまま攻撃を受けてしまう。

切られたブレスレットにはヒビが入ると同時に、彼の足元へと落ち、小さな電気を発しながら壊れていく。そして、飛び回っていたナイフは力を無くした後、重力に従い、下に落ちていった。

一瞬の気を取られたセレスが次に目に入ったのは、アレンが彼に向けて足を蹴り上げる姿だった。

真っ向から攻撃を受けたセレスは体制を戻すことなく飛ばされ、地面に叩きつけられる。

その衝撃で何処か痛めたのか、胸を押さええながら、苦しそうに息をするが、アレンはその姿を黙って見据えながらこちらに近づくと、剣を彼の首元へと差し出す。

アレンの手元から続く、殺気を含んだひやりとした感触にセレスは寒気を覚えた。

「答えてもらおうか。ノエルは何処にいる？」

「さあね。私は、アレン・ハロルドをおびき寄せるように命じられただけだから何処にいるのか知らない」

「嘘を付くなよ！」

アレンは怒鳴ると、持っていた銃を取り出し、一発撃った。弾はセレスの体に当たる寸前の地面に撃ちつけられており、どうやら威嚇用に放った一発だったようだ。

「僕は目的を果たすためなら銃を放つことも厭わない。次に喋らなかつたら、その頭、吹っ飛ばすけど？」

狂気の表情を浮かべ、銃口を狙うその姿を見たセレスは今までにないぐらいの身の危険を感じた。

やがて、諦めたように、溜息をつくとき、彼に向かって話を始めた。

「分かった。彼女の居場所は」

第三十三話

その時、後ろから何らかの攻撃が振りかざされ、セレスの体が貫かれた。

「なっ　　!?!」

目の前の出来事がスローモーションで起きているかのように彼は一言言つと倒れてしまった。

後ろでは、金髪碧眼の女性が血に濡れた大剣を優雅に持ち、不気味に笑みを浮かべながら、沈んだ彼の体を見据えている。

「あら、ごめんなさい……。てつきり、アレンかと思つたわ。この暗闇の中じゃよく見えなくてねえ」

突然の他の敵の登場にアレンはセレスを睨んでいたのをやめ、銃口を女に突きつける。

わざとらしい口調にセレスは怒りを隠せないが、刺された場所が悪かったのか、反撃して立ち上がる気力は無かった。

悔しそうに彼女の姿を見上げて睨みつけるしか無い。

「アマリエ……。貴様……。!」

「ごめんなさいねえ。これはあの方の命令だったりするの。だから、死んでくれない?」

甘ったるい、かつ冷たい声音を出し、剣を持ち直すと再び力を入れて彼の体を貫いた。

彼の体は攻撃を受けて、少し蠢きながらその動作を完全に停止させる。

彼女の容赦無い仲間の切り捨て行為に、アレンは不快そうに顔を歪ませた。

「お前ら、仮にも仲間じゃなかったのか？」

彼女の余りの卑劣な行為にアレンは怒りを覚えながら銃を持ち直した。

対する彼女は、剣を持ち直すと狂ったように大きく笑い始める。

「仲間？私らを裏切つてあんたに情報を渡そうとしたこいつが？笑わせてくれるじゃない、アレン・ハロルド。いやあ、此処まで笑つたのは久しぶりだわ……」

彼女はケラケラと気味の悪い笑い方でアレンの方を見据えながらも、地面で息絶えているセレスの何度も剣で貫いた。

その姿に彼は嫌悪感を露にするしかない。

「お前つて本当に最低だな」

「最低？冷たい目を宿しているあんたに言われる資格はなくってよ？」

「非情に仲間を捨てるお前と一緒にするな！」

そうアレンは叫ぶと彼女に向かって銃を撃ちつけるが、彼女は大剣を使い、弾を弾き返す。

彼は諦めたように銃をしまい込むと、先ほど使っていた近距離用の剣を取り出し、彼女に向かって走り出す。

対する彼女は来た攻撃を大剣で振りかざし、受け流す。

(ちっ、大剣の影響か……)

彼は彼女の攻撃の反動で、後ろに飛び、一時的に間合いを取ると、遠距離用として持っていた短剣を取り出し家の上の方へと投げつける。

投げられたナイフは真っ直ぐ飛んでいき、彼女の大剣で叩き落された。

そのタイミングを利用し、彼女の元へと踏み込もうとするが、彼の攻撃が一瞬当たる手前で、彼女の姿は消えてしまう。

(!?)

驚いて、後ろに気を回した時には既に遅く彼女の攻撃が迫っていた。攻撃が当たるギリギリのタイミングで、彼は持っていた剣で彼女の肩を斬りつけ、かろうじて攻撃を逸らす。

対する彼女は斬りつけられた傷をもともせずはこちらへ踏み込んできた。

「前と同じ手は使わせなくってよ?」

彼女はそう言って、大剣を振りかざしながら、彼の足元を蹴り落とした。

アレンはバランスを崩し、倒れこんでしまう。

彼は上からの攻撃を避けようと剣をかざすが、大剣の力が強すぎて、彼女の攻撃を受けるのも時間の問題だった。

「まあ、ある程度は剣術が出来るみたいだけど、面白く無いわね。貴方の補佐のウィルの方がよっぽど強かったわよ?」

「そりゃ、そうだ……。あいつと僕を比べちゃいけないよ。あいつは組織の中で一番の剣術の使い手だからね」

「へえ……。じゃあ、貴方の後釜は全く困らないってことね」

キリキリと迫る攻撃にアレンは冷や汗を覚えた。

このままではまずいと思うが、両手がふさがっているせいか、これといった打開策が見つけれない。

しかし、アレンはこの状況にもかかわらず、いつもの強気な口調で彼女に対して言い返す。

「勘違いするなよ。僕はそのままむざむざと死ぬつもりはない」

「あら、そのセリフ、ウィルの時にも聞いたわ……。ほんと、貴方達って……。気持ちが悪いくらい似たよっているのね！さっさと死んで頂戴！」

彼女の攻撃が更に強まり、アレンの防御の限界を超えてしまったのか、一瞬、彼のところに隙ができる。

アマリエは躊躇することなく、その部分に大剣を振り下ろした。

甲高い音を立て、何か弾き飛ばされた。

アマリエは面倒くさそうに舌打ちすると、一旦身を引き体制を整える。

アレンの目の前には、長い銀髪を束ね、白銀の剣を構えた青年が立っていた。

急いできたのかその息は荒かったが、彼はアレンに対し、間に合っ

てよかったと呟く。

「大丈夫ですか、アレン？」

彼の目の前にいたのはアレシアで入院しているはずのウィル・アーヴィンだった。

青年はアレンの容態を確認しながらも、剣を持ち直し、目の前にいる敵を睨みつける。

彼に助けられたアレンは何故此処にいるのかと言わんばかりの表情を浮かべ、言葉を紡ぎ始めた。

「お前、どうして此処に……。というか何でこの場所が分かった」

連絡があつたことは誰にも教えていないはずだ、とアレンは言うが、対するウィルは澄ました口調で彼に返す。

「病院を抜けだして来たんですよ。……始末書覚悟でね。それに、アレンの居場所を探し出す方法は容易かったですよ。『この辺でソルドの服を来た男が、何処かの場所を探して聞いて来なかったか？』と聞いて歩けば、直ぐに見当はつきます」

そんな事より、と彼は彼女の大剣の構えた姿を見据える。

ウィルの目の前にいるアマリエは彼の姿を見た瞬間、アレンとは違った、何処か懐かしそうな表情を浮かべて、こちらに向かって歩き始めた。

「あら……。あの事件以来、入院してたって風のうわさで聞いていたんだけど」

「もう少し休んでいたかったんですがね……。貴女を倒すためなら

地獄の果てまで追いかけますよ」

ウィルは彼女に向かって白銀の剣を構え直した。その目には、強い殺気が宿っている。

状況が理解出来ないアレンは、ウィルの方を見据え、構えている彼に聞いた。

「おい、ウィル、あの女とはどういう……」

「あの人は……。私の父親を殺したんですよ。私が幼かった頃にね」
予想外の言葉にアレンは言葉を失ってしまった。

彼とペアを組んで以来、一度もそういう話が出たことは無かったからだ。

話を聞いて表情が変わったアレンに気がついたのか、ウィルは、今まで黙っていてごめんなさい、といい、言葉が続ける。

「アレンを心配させたくなかったんですよ。この重荷は私だけが背負っていればいい。他人に背負わせる必要はないんです」

剣を携えた彼の表情は少し寂しげだった。

その時、アレンは彼の心情に気づく。

昔の自分と似ている。真実を追い求め、敵を討ちたいと誓ったあの時の表情に。

そうか、と彼は言う。と剣を地面に刺して立ち上がると、ウィルと並んで剣を構える。

「そういう事なら、僕も手伝うよ。一人で背負うより、二人で背負った方が負担も少なくなるしな」

「アレン……」

「お前の重荷、僕も一緒に背負ってやるよ。さあ 行くぞ！」

アレンの合図と共に二人はアマリエに向かってかけ出す。

しかし、彼女の表情は先ほどと同じく何処か憂いの表情を浮かべているだけだった。

第三十四話

二人は同時に駆け出すと、アマリエに向かって攻撃を振り下ろした。しかし、二人を相手にしている彼女は優雅な表情を浮かべ、大剣を片手に持ったまま、腰にかけてあった中距離用の刀を取り出す。

その刃は彼らが持っている刃よりも鋭くて長い。

彼女は大剣を前に出し、長刀を後ろに回すと、彼らの攻撃を同時に受け流した。

二人は攻撃を受け流されたまま、そのまま飛ばされるが、上手く受け身を取って着地すると、目の前で起きた出来事に驚きを隠せなかった。

「おい、大剣と長刀で二つの攻撃を受け流す奴なんて初めて見たぞ」

「私です……。大剣を持ちながら、長刀を操るなんて……。あの華奢な体のどこにそんな力があるんでしょう……」

全くだ、とアレンは剣を構え直すと彼は隣にいるウィルに告げた。

「冷や汗が止まらないんだが……。僕だけか？」

そう告げるアレンにウィルはいえ、私ものです、と言って同意を示す。彼らの顔色は先ほどとは打って変わって、若干青ざめた表情をしていた。

「今までの中で一番やばい敵に出会ったのかも……」

彼らがこそこそと話している様子が気に入らなかったのか、アマリエは刀と剣を持ったまま、不愉快そうに顔を歪ませた。

「ごちゃごちゃと五月蠅いわねえ。そんなに物足りないのお？ だったらもうちょっと遊ばせてあげるけど？」

彼女が、笑った瞬間。

室内の温度が急激に下がった気がした。

勿論、実際には温度は下がってはいない。

彼女の発した殺気がとてつもなく強く、彼らにその圧力がふりかかったからだ。

アマリエは、剣を構え直すと、今度は彼らがいる方へと走りだした。彼女のスピードは早く、彼らにとっては一瞬の出来事だった。

ウィルは、持っていた長剣を使い、攻撃を受け流そうとする。隣にいたアレンは間に合わないと思ったのか、攻撃を逸らすように剣を弾かせた。

直撃こそしなかったが、アレンは体制を崩し、攻撃を弾いた剣は地面を擦り合わせ、奥の方へと飛んでいってしまう。

すかさず、立ち上がり、腰にかけてあった二丁拳銃を取り出し、彼女の方へと向け発砲しようとしたその時、後ろから何らかの気配を感じた。

(!?)

アレンは身の危険を感じ、体を動かそうとするが、彼の体は止まっただままだった。

彼は首だけを後ろに振り向かせると、背後では神経質そうな男がこちらを向き、睨みつけていた。

男は自らの手を一回捻ると、アレンの体は押し倒され、彼の体はまるで上に重石が乗っているかのように動かなくなる。そして体全体に圧力がかかっているせいか声が出せない。

しかし、彼女の攻撃を受けるのに必死のウィルはまだ気がついてい

なかった。

「アマリエ、貴女だけいつまでそうやってるおつもりですか」

男の声に気がついたのか、ウィルは彼女の攻撃を警戒しながら周りに意識を向け、彼の方を見やった。

近くにいるアレンは張り付けにあつたように体を広げ、そのまま動いていない姿を見て、

ようやく、異変に気づいたウィルは彼女の攻撃の隙をついて、アレンの元へと駆け寄ろうとするが、彼女はそれを許さず、動こうとしたウィルの背後を取ってしまった。

背中に軽く傷を入れられ、病み上がりの彼はその痛みには耐えられず、膝をついた。

彼女は荒くウィルの腕を取り上げて、彼の首元に大剣を差し向けると、声を掛けてきた男のほうへと視線を向けた。

「エルザ、その言い方だと、私が彼らを奪い取って遊んでた、って
いう風に聞こえるけど？」

「事実じゃないのですか？」

「ふん……。分かったわよ、あんたの好きにきなさいよ」

エルザの言い方が気に入らなかったのかアマリエは機嫌の悪い口調で言うと、ウィルの背中を蹴り倒して彼のほうへと差し出した。

彼はウィルの方へ視線を向けると、先ほどと同じように右手を差し出す。

そして、振りかざし、一度手首を捻ると、ウィルの体は飛ばされ、ある地点の場所へと落ちた。

彼の体もアレンと同じように、張り付け状態の格好となる。

「後一つ……なんですけどね……」

エルザがそう呟いた時、室内中央部分から何かの光が発せられる。そして、彼らが眩しい、と思った瞬間、光は消え失せ、そこには二人の人物が立っていた。

一人は赤髪を整え、今は虚ろな赤目を宿している少女と、もう一人はクリーム色の優しい色合いの髪型とは対照的な鋭く黒い目付きを持った中年というには少し若い男が彼らの方に視線を向けていた。男のほうに面識があるのか、エルザは一步ずつ彼の方へと足を進めていく。

「レクシメンス様、お待ちしておりました」

エルザは深々と男……レクシメンス・コルネールに頭を下げた。レクシメンスはもういい、頭をあげなさい、と言って、彼に頭を上げさせる。

「いやいや、君が作った薬が効いたようでね。煩かった彼女も静かになってよかったよ。」

此処までご苦労だった。アマリエ、エルザ。予定より少し時間が掛かってしまったが、無事、エネルギー源を確保できて良かったよ。

しかし、あいつの姿は嫌なぐらい彼女に似ているな」

レクシメンスは、張り付けられて動けないアレンの元へと歩いて行く。

睨みつけているアレンを男は嘲笑うかのように、見下した表情を浮かべた。

「シエリーがわざわざ命がけでお前を守ったのに、自ら、源として

足を運ぶとは……。馬鹿としかいいようがないな」

「……何故、姉さんのことを知っている？」

アレンは先ほど出せなかった声が出せたことに心のなかで安堵すると同時に、突如、出てきた自分の姉の話題に疑問を持ち、男を睨みつけた。

しかし、彼の問いに男はククク……と気持ちの悪い笑みを浮かべているだけだ。

彼は少し間を開け一息吸うとそれでもかというぐらい口調を上げて喋り始める。

「何故？私がシエリーを殺したからだよ」

その瞬間、辺りの音が無音になった　気がした。

アレンは驚きで声が出せず、思考回路を停止させてしまった。

我に返った彼は、真実を知る人物に近づけたと確信したと同時に、男に対しての憎悪が沸き起こる。

「じゃあ、あの時の追っ手はお前だったのか？」

「いや、追っ手は私の部下だ。私は一切手を汚しじゃない」

「貴様……何のために姉さんを殺したんだ！」

あっけらかんとして言う男に怒りが爆発したのか、アレンの怒号がこれでもかというぐらい部屋中に響き渡る。

レクシメンスは思わず耳を塞ぎ、鬱陶しそうに見ると彼の首元を掴んだ。

「あいつらはね、私を裏切ろうとしたんだよ？裏切り者には罰を…
…。当然の報いだと思わないかい？」

「裏切り…者だと？」

「十八年前、私はこの術式を完成させるために、二人の人物に組織に入れた。

お前の姉のシエリー・ハロルドとあそこにいるウィル・アーヴィンの父親であるヴィクトル・アーヴィンの二人にな。

ただ、この二人は真実にいち早く気づき、シエリーはお前を守るために死んで、ヴィクトルは重要資料を持ち出して摘発するために、そのアマリエに粛清されたってわけだ」

レクシメンスが淡々と真実を語る口調はもはや事務的であった。

彼ら二人は、お互いの肉親に共通点があったと気づくと共に、今から行おうとしている彼の行動に嫌な予感を感じさせずには居られない。

しかし、彼らの思いに気づくことなく、レクシメンスはエルザに指示を飛ばし、彼女をあるポイントへと連れていった。

丁度、彼ら三人のポイントを繋ぎ合わせると三角形のような形になっている。

レクシメンスは隣にいたエルザにこう言い放った。

「さあ、始めようか」

第三十五話

レクシメンスの合図と共に、隣にいたエルザは何か一言唱えた後、地面に手をつけた。

その途端、彼らのポイントを線で繋ぐように閃光のような青白い光が発せられた。

そして、そのポイントは全て繋がり、大きく輝き始めた。それと同時に彼らの体に異変が起こる。

「くっ……うわあああああ！」

彼らはこの世のものとは思えない壮絶な痛みを感じながらも、アレンは赤色、ウィルは青色、ノエルは緑色のそれぞれの光を発しながら、その『何か』は彼らの体の中から出ていった。

光は彼らの体から各自出ていくと、中央部分へと集まり、地面から稲妻のような物が走っていく。

そして、その光が一つに纏まった瞬間、黒く血走った目を持った人型物体が現れた。

「これが、伝説に残る、世界を破滅する神『クラウドイオ』か……」

レクシメンスは己の望んだものに向かって嬉しそうに呟く。

世界を破滅する神『クラウドイオ』

はるか昔、ある大魔導師が発動させ、一晩で世界が滅んだと言われる伝説の神である。

しかし、この後にある人物が世界を構築して出来たのが、今のこの世界と言われているが、この話は現代のこの世界ではお伽話として語り継がれているだけであった。

目の前の出来事に信じられない、と驚きの表情を浮かべながらも、

中央で肥大化していく黒い物体と共にアレンの瞳は徐々に霞んでいく。

既に、ウィルとノエルは意識を失い倒れているようだった。

(　クソツ、こんな事で……)

中央にある黒い物体が最大に伸びきった所で、アレンは悔しい気持ちを立てながらも彼の意識は途絶えてしまった。

彼ら三人が完全に意識を失い倒れたと同時に中央に現れた黒い人型物体は形を表し言葉を発した。

『鍵なる人物を開け、発動させたのはそなたか？』

血走っている赤く鋭い眼光を睨みつけ、ソレは低い声音で、彼らに問う。

彼らは逸る気持ちを抑えながらも、出現した神・クラウドイオに答えた。

「そつだ。組み立てたのは私とエルザだ」

『我を呼び出したからには　覚悟はできているな？』

そう問われ、彼らは頷いた。

その姿を満足そうにクラウドイオは見据えると、黒い右手に力を集め始めた。

力に答えるかのように、辺りの物は嫌な物音を発し、立てかけてあった金属の棒は一瞬にして砕け散ってしまう。

同時に術式を発動させた彼らとクラウドイオを中心にして黒い闇が広がり始めた。

「もうすぐだ……。もうすぐしたら私の世界が完成する……」

独り言のように呟くレクシメンス。

その姿に少し離れて彼を見ていたアマリエは、苦笑いを浮かべながらも辺りを渦巻く環境に何処と無く違和感を感じ始めた。

（ 何だ、この気配は ）

女流剣士である彼女にとって、今、自らの体で感じた感覚に違和感を感じざる得なかった。

この闇を包みこむ為に先ほど発生した霧が原因だろうか？と思考を巡らせ、意識を集中させて気の流れを読もうとするが、霧にはそんな力は感じさせない。

寧ろ、彼らの望みに答えようと、快感に近いほどの力が発せられている。

では、何なのだろうか……。と彼女はふと神が降り立っている中心部に視線を向けると

（ なっ………！ ）

アマリエは思わず目を見開かざる得なかった。

霧に覆われて、はっきりとは姿を映し出せていないが、神の他に何かがある。

今、降り立っている神とアマリエ達以外ではエネルギーとなったアレン達三人しかおらず、さらに彼らも既にもぬけの殻であるため起き上がれるはずもない。

彼女の驚いた表情に気がついたのか、満足そうにクラウドイオの行

いを見ていたレクシメンス達は怪訝そうな表情を浮かべた。

「どうした？アマリエ」

あそこに何かいる、と一言いえばいいだけなのだが、声が出ない。その声が出ない原因は己の中でいきなり渦巻いた寒気と恐怖からだったという事に彼女は気がついた。

幾度と無く強い敵と戦い抜いてきた彼女だが、今回ばかりは全く違っていた。

この決るような視線はなんだ。

先ほど戦ったアレンやウィルから向けられた殺気とは比べものにならないほどの憎悪を感じ、それは彼女ら三人に向けて完全に向けられていた。

辺りの霧は濃さを増しながらもその姿は段々とこちらに近づき、彼女らの視界の範囲に入った時、その姿は映し出された。

しかし、此処でも彼らは一層のこと驚きを隠せずには居られなかった。

「アレン……だと!？」

彼らの目の前に立ち尽くしていたのは、先ほどあった体内エネルギーを全て奪われたはずのアレンであった。

なぜだ、とレクシメンスは動揺を隠しきれずはおらず、エルザに至っては全くの予想外だ、と口にはしている。

最初に彼の姿を見つけた彼女も驚きのあまり言葉を失ってしまった。

「良くもまあ、勝手にやってくれたもんだねえ」

アレンの口から発せられる言葉に彼らは不審感を否めなかった。いつもの冷たく見下ろした表情は変わらずだが、その口調は男が喋っているようではなく、まるで違う女が喋っているかのような話し方だった。

アレンは先ほど、アマリエに飛ばされた剣を拾っておいたのか、軽く弄びながらもこちらに向かって歩き進める。

「レクシメンス、久しぶりね。十八年以來って所かしら？」

「き、貴様は何者だ……？」

目の前にいる人物はアレンではない。

いや、アレンの姿をした他の人物と言ったほうが適切だろうか。

レクシメンスは心の奥底でこの口調に覚えがある事を思い出していた。

だが、それを口にするのは憚れる。

何故なら、彼が考えている事は有り得ないことだからだ。

顔を引きつらせているレクシメンスの感情を読み取ったかのようにアレンは睨みつけ、話を続けた。

「何者？その表情を見る限り、誰だか分かっているみたいだけど？いい加減、気がついたら？」

嘘だ、と彼は首を振って否定するが、その姿をアレンは許さない。

「嘘じゃない。あんたを陥れるために、わざわざ冥界から戻ってきたんだ。感謝して欲しいくらいだね」

レクシメンスの悲鳴に似た声が響きわたって木霊する。

「何で、シェリー・ハロルドがいるんだ……！」

彼の目にはアレン・ハロルドの姿ではなく、消滅したはずのシェリー・ハロルドの姿が自然と目に焼き付いていた。

(っ?)

アレンが再び意識を取り戻すと、目の前に広げられている光景に違和感を感じさせる得なかった。

彼の視界の前にはアマリエたちが顔を引きつらせて固まっている。しかし、体は別の誰かに操られているようで、己の意識を飛ばして体を動かそうとするが、何者かの意識によってそれは遮られてしまふ。

何度かコントロールを試していると、ふと、彼の意識の中に何者かが話しかけてきた。

(アレン、目が覚めたか)

その声はとても優しく彼にとっては何処か懐かしい感じを覚えるような声だった。

聞き覚えがあるのに思い出せない。

誰……だっけ？と彼は心の中で思考を巡らせる。

(……まあ、十八年も時が経っていたら記憶もだいぶ薄れるか)

十八年。

そのキーワードに彼は何か気がついたようだ。

まさか、と彼は心の中で蠢いた感情に対し、必死に振り払おうとするが、語りかけてきた声はそれを肯定し始めた。

（そのまさか、だよ。久しぶりだな。アレン）

温和な声で彼は思わず、泣きそうになるが、体の制御は彼女に取られており泣くことは叶わない。

シエリー・ハロルド。

十八年前、彼をかばい死んだはずの彼女が此処にいる。

それだけでもにわか信じがたい事だが、彼にとっては奇跡のような出来事だった。

何故、と問う前に彼女は彼に向かって語り始める。

（まあ、特殊な事情があつてね……。今は冥界にあつた私の魂をアレンの体に憑依させてる状態だ。それで、今は私がお前の体の制御を全て握ってる）

彼女は先ほどよりも声のトーンを落とし、深刻そうな口調で話す。

（詳細を話している時間はない。ただ、アイツらは世界を破滅させるための術式を組んで発動させてしまった。そして、今、私達が住んでる世界は破滅を迎えようとしている）

それを聞いた彼は信じられない、と言つて驚きを隠せないようだ。対する彼女は予想の範囲内だったのか何も言わずに話を続ける。

（信じるも信じないもお前の勝手だ。ただ、今は実際に起こっている。後、数時間もすれば世界は破滅に導かれ人類も全て消えてしまう。それを食い止めなければならぬ）

どうすればいい、と彼は彼女に問う。
彼女は彼に対し、一つの提案を持ちかけた。

（ あそこにいる神・クラウディオを打ち倒すしかない。しかし、クラウディオは破滅の神とあって通常の攻撃は効かない。だから、お前の体を使って私が持っている脈術の知識を使い、あいつを倒すしか無い）

分かった、とアレンは心の中で頷く。
その様子には彼女は安心した様子で呟いた。

（お前が物分りの良い弟で助かったよ）

さて、と彼女は彼に向かって言うと、アレンの体を操り、剣を握り直す。

（お前の腕前と成長の程も一緒に見せてもらおうか）

その合図と共に、まずはアマリエ達三人の動きを止めるために、剣を構えて走り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1615g/>

Ein Band der Rache

2011年12月18日08時45分発行